

タイオワン（台湾）をめぐる 17世紀の海外貿易

松 竹 秀 雄

第1章 タイオワンから台湾へ

第1節 台湾序説

第2節 17世紀の台湾事情

第3節 呂宋とスペイン人

第2章 台湾への航海及びゼーランディア城

第1節 台湾と日本

第2節 ゼーランディア城

第3章 ノイツと浜田弥兵衛の事件

第1節 タイオワン長官ノイツ

第2節 タイオワン事件

1. ノイツと浜田弥兵衛の事件
2. タイオワン評議会と浜田弥兵衛のゼーランディア現地協定
3. タイオワンから日本へ、そして入牢
4. 事件の問題点
5. タイオワン事件の解決

第4章 鄭氏台湾

第1節 一官鄭芝龍

第2節 鄭成功の鄭氏台湾

第5章 結び

第1章 タイオワンから台湾へ

第1節 台湾序説

台湾について、漢籍に載る台湾最古の記録を戦国時代（前403～前221）の地理書（禹貢〈書経の一篇〉）にさかのぼって、同書の「島夷」がそれであるとする説もあるが、3世紀半ばの「臨海水土志」の中の「夷州」が台湾史最古の記録とするのが通説としてよいであろう。

行政機構的には元代以降という。

明代になると、沖縄の中山王が明に進貢しているのが記録に出てくる。元を滅ぼした明の建国は1368年であるが、明実録によれば、その4年後の1372年2月6日に、「遣楊載，持詔諭，琉球国……」，同年12月26日に、「楊載使琉球国，中山王察度，遣弟泰期等，奉表貢方物，詔賜察度大統曆及織金文綺沙羅各五匹，泰期等文綺沙羅襲文，有差」とある。中国側は沖縄を琉球・瑠球と称したが、台湾を小琉球と呼ぶのに区別して、沖縄を大琉球とした。台湾を小琉球と称した名残は、現在のカオシュン（高雄）の南にリウチウ島（琉球嶼）として残っている。明の武将鄭和の南海遠征は1405年～33年間に7回にも及んでいるが、琉球の入貢はこれよりも33年前に始まっている。

台湾に関しては、明朝も清朝も明確にはその領土とした模様は無く、「台湾は古来土匪の巢窟を以て世に知られ，清国領治時代より匪賊各地に蜂起して殆ど寧日なく，時の清朝もまた如何ともする能わず，之を南荒化外の地と称し……」³⁾，また，パタビア城日誌による1624年1月の中国とオランダの交渉に於て，「総督若し（オランダ側が）澎湖島を棄て，タイオワン又は附近の他の地に定住することとなさば，同所が支那の領域外に在る限り，支那人は同所に赴きて我等と貿易を行うべく……」⁴⁾とあり，またオランダが澎湖島からタイオワンに移転した7ヶ月後の1625年4月6日の日誌にも，「彼はまた支那人はタイオワンに行きて我等と貿易を行う許可を得たりといえり。但し宮廷よりは未だ公然の許可出ず，軍門都督及び大官等これを黙認せり。また我等が支那の領域外に留り，今後，支那の領域に於て軍事行動をなさざる限り，タイオワンに於ては貿易上不足なかるべきを保証せり」⁵⁾とあって，澎湖島までは中国官憲の勢力範囲であるが，台湾はそうでないとする意識であった。

通航一覧によれば，「台湾府は旧名北港といい，東番とも号し，地勢穹弓に似たるをもて，のち台湾と称すと明史にあり，郡国利病書には台湾と記す，……古昔荒服の地たりしが，隋の開皇中虎賁陳稜といえる者を遣わし，澎湖36島を略し，元の末には巡司を置，明の嘉靖42年（1563），倭寇林道乾といえるもの，福建近海を掠めしにより，都督大猷これを征しかば，遁れて台湾に退屯し，終に倭地となす。また万暦間，海寇顔思齋，台湾に住せしが，鄭芝龍帰唐して彼に属し，思齋死して（1625年）芝龍魁首となる。後，この地を去りしかば，遂に蘭人押領して売買の窟穴とし，崇禎8年始めて築城して赤嵌城と名づく，云々」⁶⁾とある。

タイオワンは，台湾島の西岸タイナン（台南）の外港にあって，そこは鄭成功が占領した後のアンピン（安平）に当たる。オランダは1624年9月始めここに移転開始し，その城を最初はオラニエ（オレンジ）城といったが，1627年にゼーランディア城と改称した。

台湾島はポルトガル人がマカオを1557年に根拠地とした頃，航海によって自然にこの島を発見し，これにイリャ・フォルモサ Ilha Formosa（麗しの島）と名づけ，以来，ヨーロッパ人は台湾をフォルモサと呼ぶようになったのであるが，但しポルトガル人ははるか沖合からこの島を見たに過ぎず，台湾島中部に大河流（濁水溪・チュシヨイ川）あるを海峡であると見て，本島は二大島嶼よりなるものと考え，その北部をフォルモサと呼んだので，この島全

体をフォルモサと呼ぶようになったのは、オランダがこの島を根拠地として以後⁷⁾である。

なお、明代の記録には大宛・台員等と記され、後に台湾の字が当てられるようになったが、台湾南部のタイオワンがこの島の全体を指す名称となったものである。

本稿では、オランダ・スペイン及び鄭氏の台湾割拠、並びにそれに附随する事件を取りあげながら、台湾島周辺が東南アジア海域に於て、日本～南洋の縦の線及び中国大陆～呂宋～メキシコの横の線の交易上の重要な十字路に位置していたことに焦点をおいて考えて行きたい。

第2節 17世紀の台湾事情

1624年2月のバタビア城日誌によれば、「蕭壠 Solang の村或は町は、フォルモサ Formosa の島にありて、タイオワン港に臨み、人口少く、甚だ野蛮なる人士居住せり。その身長は平均して我等より高し。彼等は裸体のまま歩行して恥ずることなし。婦人は男子より少しく羞を知り、その恥ずべき場所は幅20cmの腰布又はリネンの小布を以ておおい、外国人に対しては恐怖を抱けり。蓋し彼等は日中その夫と共に居らず、2～3人又は4人共に住居するが故に、右は驚くべきことに非ず。夫もしこれに会わんと欲すれば、婦人の許に行かざるべからず。但しこれは夜間に限ることなり。而して時には15分或は半時間の距離にして、ローソク又は油を使用さざるが故に、暗中を歩行するの外なし。家に在りても燃ゆる藁を以てこれを照らせり。婦人との会談は2時間乃至3時間以上継続せざるが如し。外国人又は友人、彼等を訪問するときは、これに示す最大の歓待は婦人の住する家に同伴することなり。我等に対しても、この地方に於て最も重要なる者と認められる人、これをなしたり。その妻の居住せる家に近づきし時、まず1人の僕を出して二・三語話さしめしが、通訳より聞きたる所によれば、その妻の家に入ることを得べきか尋ねさせたるなり。而してその承諾を得てその家に入りたり⁸⁾」とあり、また「婦人は（観察し得たる所に依れば）操正しく、全く売淫の傾向なく、談話は好ましく、身体は恰好良く、顔の形は我が国人よりも整い、その色は栗色・褐色なり。婦人及び男子共に頭髮を長くし、ひげはこれを剃る。その言語には食することをマカン mackan、豚をバボヤ baboya、火をアピ api といい、その他多くマレイ語を用う。故に（また多く支那語を用うるにより）統一せざる混合の言語なり。男子はその妻に対し甚だ嫉妬深く、他人と少しにても交際することを喜ばず、彼等は好奇心強くして、頭髮及び身体を見んことを欲し、彼等に近づくときは、その欲するがままに我等の帽子を取り、上衣を脱がしむ。彼等の居住する家は地上5～6呎の処⁹⁾にあり、該地に多く産する竹を以て造り、外見甚だ奇麗なり。この地には少しばかりの灌木のほか樹木なし。彼等の家の内部は倉の如く、空虚にして家具なく、彼等の敵の首級及び骸骨のほか蔵するものなし。彼等はこれを持ちて、小児の如く街上に遊べり⁹⁾」とある。

また、長崎の出島商館長をつとめ、1662年の最後のタイオワンの長官であったフレデリック・コイエットの書いたものによれば、「この土地はまた非常に人口が多い。男性は全体と

して身長が高く、胴体も四肢もたくましい。彼等の肌の色はインディアの他の住民と同じく、褐色と黄色の間である。彼等は夏の間はまったくの裸で、羞恥心がない。女性はこれに反して、概して小柄で身長が低い、肥っていて丈夫である。彼女たちは男性よりも少しばかり色が白い。彼女たちは衣服を身につけ、生まれながらの羞恥心を保っている。彼等は男性も女性もともにみな親切で、やさしく、我々があまり頻繁に訪れない限り、それぞれの豊かさの程度に応じて、我々を食物や飲物でもてなす¹⁰⁾とあって、38年後のタイオワン附近の現地人の風俗が変ってないことを裏付けている。そしてこの人々は台湾の先住民族、つまり、コイエットのいう「フォルモサ人」は日本統治時代には「高砂族」と呼ばれた人々であって、彼等はオーストロネシア系の民族で、人種的・文化的に東南アジア群島部に住むマレー系の諸民族と深い関係がある¹¹⁾といわれる。

またコイエットは、「彼等は誰かから何かを軽々しく盗もうとはしない。彼等は自分たちと友情や結びつきをもった人々に対しては非常な信頼を示す。彼等は背信を事とはせず、この点では、心の中でいつも人を裏切ることしか考えていないインディアの他のすべての人々とは正反対である。それどころか、彼等は背信によって誰かを悲嘆の底につき落すよりは、むしろ自分たちが死を選ぶか、或いはあらゆる苦しみに耐える方がましだと考えている。彼等は自分たちに教えこまれることについては非常によく勉強する。彼等は判断力が確かで、物事を理解したり、或いは忘れないようにしておくのに十分な記憶力をもっている。

彼等の最も主要な生業、つまり職業は、田を耕して米を播くことである。彼等はたとえ田を充分広く持っていたとしても、自分たちが必要とする食料を手に入れるためだけにしか播種しない。それどころか、時には食料がむしろ若干不足することがある程なのである。

男性は労働を好まない。従って女性が土地を耕し、大部分の、また一番の重労働をも行う。そして稲がみのって刈り取られると、全員でそれを自分たちの家に運ぶ。

彼女たちは必要な米を手に入れるためだけにしか脱穀しない。つまり自分たちがほしいと思うだけしか米を搗かないのである。これはみな妻の仕事である。夕方になると妻は二つか三つの稲束を火の上につるして乾かす。そして翌朝、日の出の2時間前に起きて米を搗き、その日の準備をする。これは毎年続くのである……………

一方、男性とくに17才から21才までの強壮な若者は怠けている。40才から60才までの老人は妻を畑の小屋におき、2～3ヶ月に1度しか村には戻らない。彼等が村に戻るのとは大体に於て祭日とされている日である。それ以外の日は、彼等は時々妻が畑で働くのを助けるが、そうするのは極めて稀なことである。彼等は自分たちの村の中に立派な大きな家をもっており、その建築や装飾は非常に珍しいものである。それは竹で作られ……………装飾品の中で最も大事にされているものは、彼等が自分たちの敵から奪った首（頭蓋骨）、頭髮、あるいは首である。……………前に述べたように、男性は労働を嫌う、彼等の仕事の大部分は戦闘と狩猟である。狩猟は、わな・投槍及び弓矢で行なわれる……………¹²⁾」。

戦闘に関して、バタビア城日誌に次のようにある。「彼等はまた数人の僧侶を有し、また

竹を以て造り、この地に多く産する鹿及び豚の顎骨を飾りたる7ヶ所の教堂を有せり。彼等の僧侶は戦争に臨まんとする時のほか、公に説教を行うことなし。僧侶は大きな約1呎の亀2匹の尾を木片にてかたく結びつけ、拳大の球を附したる木をのせ、臍につなぎ、これを引きてその腹を出し、又は引込め、此の如くして教堂の前に於て愚人を驚かせり。特に満月の時と月の欠くる時、日出前2時間これを行い、日出づれば退出せり。人死する時はこれを焼きて粉末となす。彼等は戦に臨む10日乃至12日以前に、教堂の立てる広場にその楯を懸けて、これを人に示す。その武器は槍及び弓にして、腰に一刀を帯し、甚だ活発にこれを使用す」また「彼等の間には首領あることを認むるを得ず。通訳も我等に然りと告げたり¹³⁾」とある。

30数年後にコイエットもまた同様に書いている。即ち、「この島には島全体を支配下に置く国王とか、支配者とか、頭目とかは居らず、全体が幾つもの村に分れているのである。それらの村の一つ一つはみな独立しており、自分たちの領土を持っている。彼等はそれ以上の権威を認めていない。またどの村にも、人々に対して専制的な支配を行なうような特定の頭目はおらず、(その代りに)一つの会議があるだけである。それは12名の男性から成っている。彼等はクァティと呼ばれている。クァティは全員が2年毎に交代し、ほぼ40才くらいの人々、及びそれよりも若干年長の人々から選ばれる。この場合、驚くべきことは彼等は年令を数えることを知らないのである。尤も、彼等は互いの年令をはっきりさせることができる。これは誰が何年何月何日に生れたかをよく記憶することが出来るからである。この会議の構成員は2年の任期が終ると、それぞれ額の頭髮と頭の両側のこめかみまでの頭髮を抜いてしまう。これは自分たちが会議の構成員だったことがあり、しかもその任務からすでに解放されたのだということを示す名誉のしるしなのである。そして彼等の代りに、同じくらいの年令の新しい構成員が選ばれる。

クァティ、即ち会議の構成員の権力、あるいは権威というものは絶対的なものではなく、また村民全体が彼等の承認したこと、もしくは決定したことに服従するよう強制されるというものでもない。彼等の権力は大体に於て次のようなものである。即ち村民全体に関して何をすべきであるか、又は何をすべきでないかというような問題が生じた場合、まずこれらのクァティが全員集まり、村民に対してどのような助言をするのが最も良いと考えられるかについて議論をして、結論を出す。合意に達すると、彼等は村民のある場所、通常は教会の周囲に集合させる。そして村民全体に対して議論すべき問題を正式に提案する。クァティは村民に対して賛否両論を半時間ほど開陳して、説得をつくす。こうしてクァティは村民を自分たちの選択した決定の方向に誘導しようと試みる。

この演説の間も秩序は良く保たれている。そして(クァティの)一人が疲れたり、或は意見を述べ終えたりすると、仲間が次々と交代するのである。彼等は雄弁で、話し上手であって、その話し方は人を強くひきつけるものがあり、また力強い。一方彼等が話している間中、村民全体は非常に静粛にして、熱心に聴きいっており、いささかも興奮しない。

演説が終ると、提案された問題について村民の間で議論が始まる。彼等はクァティの決定

が良いと思えば、そを実行するし、そうでなければ自分たちが良いと考えたことに従う¹⁴⁾とあって、台湾島全体を支配する者がいなかったこと、男性は戦闘と狩猟を専らにし、敵の頭蓋骨を部屋に飾るというような一見野蛮じみたことをする反面、村落政治が専制的でなく、民主的な感覚を以て運営されていたという、17世紀に於ける驚くべき一つの世界をかいま見てきた。あたかもタイムトンネルによって、我国の縄文時代末期から弥生時代にかけて、未だ統一政権めざしての争いが無かった頃に、突然とび込んだような錯覚さへ覚える程の、これが1620年代から1660年代始めまでの台湾の素顔であった。

そしてこの島の産物は、正にその当時の風俗にぴったりの「鹿」であって、バタビア城日誌に、「支配人より米及び塩の供給を受け、シリ siri・檳榔子・椰子・バナナ・レモン・蜜柑・西瓜・瓢・甘蔗その他美しき果樹沢山に生ず。然れども土人は刈込み、また截ることなく、また椰子樹の栽培を知らず、鹿は多数にして、彼等はこれを射る。その肉及び皮はこれを乾燥し、支那人はこれを安価に買取り、又は物と交換す。彼等は金銭を知らず。右の村に於ては男子の居住する所に、1・2・3人また時に5～6人の支那人同居し、彼等を圧迫し、もし用を為さざる時は直ちにその毛を断ることを以て脅せり。彼等は支那人を恐ること甚しく、もしその手を以て仕事を能くせざる時は食物を得ず。支那人はまた直ちに塩を断ちて苦しむべしと脅かし、これによりて能く服従せしむ¹⁵⁾」とあり、コイエットの記録にも、「この島は非常に肥沃で、あらゆる種類の根果（食用となる地下茎）や果実を産出する。同地ではそれらが非常に美味でまた多量に産出する。同島では若干の肉桂樹が成育し、また生薑を産出する。

同島には牛が多く、また特に鹿が非常に多い。鹿は世界中のどこよりも数が多く、塩漬けの鹿肉や乾燥された鹿肉が毎年何隻もの船に満載されて、取引のために中国に送られる。皮はここから約245マイル離れた日本に向けて送り出される。

このほかに、野生の豚・小鹿・山羊・兎・野兎・あなぐま・野生の猫・やまうずら・鳩・へらじかを産する。野生の有害な動物、或は毒を持つ動物、たとえばインディアの他の地域には沢山いるライオン・大蛇（など）は虎を例外として、ごく少数もしくは全くその姿を見ない¹⁶⁾とある。

総じて、背高き男と、背やや低く肥えた女性たちの非常に人口が多い¹⁷⁾、そして天然の美果と、自然の狩猟動物に恵まれた、そして軽々しく盗もうとせず、人を裏切ることもしない平和郷というに値する麗しの島フォルモサ島であったのである。

第3節 呂宋とスペイン人

フィリピン群島¹⁸⁾はルソン島・サマル島・レイテ島・ミンダナオ島などの骨核諸島のほか、カラミヤン諸島・ビサヤ諸島・スル諸島など、島数は7000とも8000ともいわれ、太古にはアジア大陸・マレー半島・ボルネオ島などと陸つづきの時代もあったと推定されており、群島の旧人は大陸から移動したものと考えられている。

今から約1万2～3000年程前の気候の温暖化と、それに伴う氷河の融解と海水面の上昇は、日本列島を対馬陸峡部等で大陸から断ち切ったと同様、これらの東南アジアの諸島も大陸から分離して、ほぼ現在の姿になったと思われるが、その後の新しい人類は、初期石器時代に「背が高く、褐色で、顔はほりが深く、ほっそりした人種、インドネシア人A¹⁹⁾」と、そしてその次の時代に「三角形の屋根をふいた家をたて、米をもたらし、木の皮をたたいて衣類をつくり、それに染色を加えたという。ずんぐりした身体つきの濃い褐色で、唇は厚く、大きな鼻をしているのがその容貌の特色といわれるインドネシア人B²⁰⁾」がインドシナ半島や南中国などからこれらの群島に舟によって移住したという。

更に我国縄文晩期から弥生初期の頃、銅と青銅製の道具をもった本格的な水田米作を行なう別の新しい人種が流入し、主にマレー人種が13世紀まで断続的に流入して、フィリピン先住民と混血して行った。²¹⁾この新しいマレー人種によって、インドからの、サンスクリットに語源を発するアルファベットや言葉が持込まれ、現在のタガログ語の中にその痕跡を留めるといわれる。

フィリピン群島と中国との交易は、9世紀の頃から始まったらしく、宋代の「諸蕃志」（1225）によれば、「麻逸国はボルネオの北にあって、千余の家が集落をなしている。河をはさんで生活し、原住民は布を着ている。また腰だけ布をあてがっているものもいる。銅の仏像がある。盗人は少ない。商船が入ってくると官場へ来るわけだが、そこでは各地の村々から、いろいろな物産をもってきた民衆でいっぱいになり、繁華をきわめる。酋長はふだん、傘を用いており、商人はまずこの酋長に贈物をもってきて交易の許可をうける。……商人たちは、かめや金貨・鉄のあがた・針などをもってきて交易をする²²⁾」とあり、但し長沢和俊氏によれば、²³⁾麻逸国はフィリピンのミンドロ島とあり、憑承鈞氏によれば²⁴⁾麻逸国（マイト又はマイツ）はフィリピンを指すとある。

交易は、守川正道氏によれば中国からは陸つづきのインドシナ・マレー半島あたりから、ボルネオ・インドネシアを通じての海流にさからわない交易であったといわれるが、イスラム商人が中国商品をフィリピンに持込み、そのためフィリピンには中国人の物産があふれ、ルソン島には中国人居住区が出来た²⁵⁾という。

航海に関しては947年頃著わされたアラビアのマスディーの「黄金の牧場」によれば、「…船に乗ってウマーンに赴き、そこからカラフ（マレー半島西岸）の国に船出した。この国はシナやその他の国に至る中間にある。現在、シーラーフ人やオマーン人のイスラム教徒の船は、この国（カラフ）でシナからの船で帰ってくる者と会合する。……シナの事件（黄巢の乱）が起こり、正義がなくなったので、二つの都市が中間点で合流するようになった²⁶⁾」とあるのとはほぼ同様の記述であるが、しかし中国南部からみれば、台湾南部からバタン諸島・バブヤン諸島・ルソン島と島伝い道であって、所謂「海のシルクロード」といわれる中国～交趾～マレー半島～セイロン～マラバール～アラビア海、とは別個に中国からルソン島への直接のルートがあったと考えてよい。これは1574年に中国のリマホン（林鳳？）が62隻の

大船団を以てマニラを襲った、という記録からも理解できよう。

また、木村正弘氏によれば、1580年代には毎年30～40隻ものジャンク船が広東・漳州・福州からマニラに来るようになり、これらの中国船は、各省を3月の新月の時期に出帆し、モンsoonに乗って15～20日間でマニラに到着し、ベンダバール（南々西の季節風）が吹きはじめ5月末までに帰帆したという。

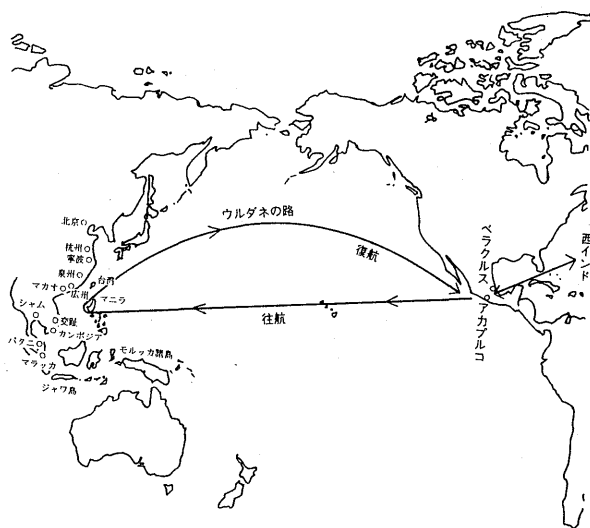
前記黄巢の乱（875～884）では、「彼ら（シナ人）の事情に精通している人の話によれば、殺されたシナ人を除外しても、この町（^{ハーフ}府＝広州）に住みつき商業を営んでいたイスラム教徒・ユダヤ教徒・キリスト教徒・ゾロアスター教徒、合せて12万人を彼は虐殺したとのことである。虐殺されたこれらの四つの宗教の信者数が正確に知られているのは、シナ人が彼等の（頭）数で課税していたからである²⁷⁾とあって、他国から貿易によって住みついていた人々の為の一種の租界のような町（宋代のいわゆる蕃坊）が実質的に既に出来ていたことをうかがわせる。そしてイスラム教はマレー半島からインドネシア・ボルネオと伝わり、フィリピン群島も逐次布教がひろがって、1565年にスペインのミゲル・ロペス・デ・レガスピの艦隊がメキシコから一気に太平洋を西へ横断し、セブ島に今日のセブ市の基礎をつくり、東洋における最初のスペイン人居留地を確立した頃、マニラはイスラム王国の一つであった²⁸⁾といわれる。

さて、中国の明が建国した1368年の翌年、1369年に明使は我国に対して朝貢を求め、且つ倭寇禁止を要請し、その翌年もまた朝貢を促すのであるが、明太祖実録巻38によれば、「洪武2年（1369）正月丙申朔、遣使、以即位詔、諭日本・占城・瓜哇・^{さいよう}西洋諸国。（是月）倭人入寇山東海浜郡縣、掠民男女而去」とあって、明が建国したこの頃、既に倭寇が広範囲に活躍していたことが知られる。そして琉球（沖縄）は洪武5年（1372）12月、「楊載使琉球国、中山王察度、遣弟泰期等、奉表貢方物……³⁰⁾」として始めて明実録に進貢の記録が出てくる。この年、フィリピンも明に進貢するのであるが、始めて呂宋の名称が登場する。明史に、「洪武5年（中国が）使いをやって以来、来貢するようになった。……が、しばらくとだえていた。……仏郎機によって征服され、呂宋と称するようになった。これより先、閩人の中には、この地が近くて豊かなために、ここと交易するものが多く、その数は数万人にのぼった³¹⁾」とある。これによっても中国南部と呂宋島との直航交易をうかがい知ることが出来る。しかしこの時期の明朝は、国内の治安を保ち、密貿易取締るため、対外貿易を朝貢貿易のみに限定しようとし、1371年に通蕃下海の禁、所謂「海禁」を行い、1374年には貿易関税を司どる市舶司も全廃している。ところが明の第3代永楽帝（1402～24）となるや、積極的な対外政策を打出し、その一環として鄭和の南海遠征が行われる。

鄭和の南海大遠征は1405年から1433年までの28年間に7回、遠征は30余国に及ぶもので、その結果、南海諸国の朝貢が相次ぎ、南海貿易の活発化をもたらした。フィリピンへは1405～6年、1408～10年、1417年と3回、60隻の大艦隊がリンガエン・マニラ、そしてミンドロ島・スルー島にやってきたため、明代の中国とフィリピンの交流は以前に増して盛んになっ

て行ったという。但しこの当時のフィリピン群島は、「マレー系、インドネシア系・中国系・インド系などの人種が、幾つもの島々で平和な、独自の生活を営んでいた」自由で豊かな生活の島々であった。

さて1521年、マゼランが南アメリカ南端部經由で東側からフィリピン群島中のセブ島に到着し、彼の死後残された船員はアフリカの喜望峯經由で本国スペインに帰り着き、世界一周航海をなし遂げたのであったが、この当時ヨーロッパからマゼラン海峡を通してアジアに向けて航海することは、南北両回帰線間の広大な海洋帯に絶え間なく東からの貿易風が吹く関係上、太平洋は一方通行の路となっており、マゼラン海峡の方へは戻れなかった。ところが1565年（我国永禄8）ロペス・デ・レガスピの艦隊はメキシコからセブ島に到着し、同年メキシコで修道士・地理学者として過ごしていたアンドレス・デ・ウルダネがフィリピンからメキシコへの帰還航路の発見を申出て、大胆にも北緯42度海域まで大きな北寄りの弧を描きつつ太平洋を横断してメキシコに帰り着き、東航が可能であることを実証した。この航路は「ウルダネの路」として、1年1度メキシコとマニラ間を往復する3層ないし4層甲板の大帆船が定期的に航海すること³⁴⁾となっており、スペインのフィリピン植民は進んで行ったのである。



1569年8月、レガスピは「セブ島その他の島々の総督及び軍司令官」即ちフィリピン総督に任ぜられるが、その前月7月に本国への報告にみるフィリピンの風俗は、「フィリピン群島は豊かな資源をもつ多数の島から成っている。……そのため民衆は世界で最も働かない民衆である。……土地は未耕地が殆どであり……きっと豊富な金が埋蔵されているであろう。……また島の各地では真珠が発見

されるし、……肉桂もとれるし、……これらは今一番もうかる産物だ。スペイン人がこの地に植民をすれば、沢山の金・真珠その他価値あるものが手に入ることは間違いない。しかも中国と貿易が出来る。そうすると絹や陶器・安息香・じゃこうなどが手に入るであろう。……こういうことを達成するのに先ずもって大切なことは、植民であり、移住である。云々³⁵⁾」とある。1570年5月にはフィリピン在住のスペイン人は、1500名を数えるに至ったという。

但し、スペインのフィリピン経営拠点とするための強引なマニラ攻略は、当時一個のイスラム王国を形づくっていた所への侵攻征服戦争であって、先ずフィリピン土民と共存してい

た中国人の抵抗を排除し、フィリピン人を撃破してのもので、為にマニラはスペイン人の砲撃と放火によって焼け野原になったといわれ、1571年（我国元亀2）6月24日にレガスピは総督名でマニラを全フィリピンの首都としたが、1574年8月にスペイン人の略奪への反発からフィリピン人の武装蜂起となり、途中で潮州出身の巨魁林鳳ら台湾・澎湖島を巢窟とする中国人海賊³⁶⁾によるマニラ市攻撃もあったが、やっと1575年3月におさまって、その後スペインのアジアでの植民地として固まって行った。つまり、「自由で豊かな生活」のフィリピンは、数年にしてスペインの植民地となり、スペイン統治長期間、強制労働にあえぐようになって行くのである。

そして天正19年（1591）秋、豊臣秀吉からフィリピン総督宛に投降の書が贈られる。その本文中に出る原田孫七郎は、肥後の人で早くから海賊としてマニラに赴き、その事情を知っていたのでルソン征服の策を、長谷川宗仁を経て秀吉に説いたもので、秀吉は孫七郎を使とし、書簡をルソン長官ゴメス・ペレス・ダス・マリニャスに送り、入貢を促したものである。そしてこの翌年、秀吉は台湾へも入貢を求める使者を出したので、フィリピン政庁はこれを伝聞して、日本は台湾を足掛けとしてルソンを攻める意向であろうと考え、後に日本に先んじて台湾を占領する計画を立てることになって行く。

マニラの中国人は、スペイン人によって一旦はマニラを追われたけれども、1567年の明の海禁緩和もあり、「シナ船の渡航貿易が盛んとなり、その移民も来航船ごとに残されて、1573年（我天正元年）に8隻位であったのが1584年（天正12）代には、1年25隻ないし40隻位に増大し、人口も1580年頃の600人に過ぎなかったのが、1590年代にはシナ移民の総数2000名を数える程に増大した⁴⁰⁾」という。

シナ船が一旦ルソンに航海し、ルソン在住シナ人の商船が日本に直航することもあったらしく、また「南方水域の航海に慣れたシナ人の中には進んで日本船に乗組んで、パイロットとして直接日本船を南方港湾に誘導するものもあった。1593年マニラに入港した原田喜右衛門船のパイロットもシナ人⁴¹⁾」とあり、この原田喜右衛門は原田孫七郎に続いて文禄元年（1592）7月、秀吉の命によってルソンに入貢を促す使節として派遣されたものであったが、孫七郎は熊本の人原田喜右衛門の番頭であった⁴²⁾という。

1595年（文禄4）、使節として日本に派遣されたパードレのジェロニモ・デ・ジェズスがフィリピン群島長官ゴメス・ペレス・ダスマリーニャスに送った書簡に、「マカオの人々は、日本船がマニラに赴き、その地から生糸およびその他の商品を持ち帰らんと欲して、その結果彼等の船載する品々の値が下落するのを見て、これを妨害せんと大いに努めた⁴³⁾」とあり、また16世紀から17世紀にかけて、フィリピンに在任していた副長官アントニオ・モルガも、「若干の日本人およびポルトガル商人も、また毎年北風に乗じて10月末と5月末とに、日本の長崎港から来航し、いずれも同様にマニラに入港碇泊する。……彼等は日頃多量の銀を延板の形で商品として持ってきて適当な値で売払う⁴⁴⁾」とあり、秀吉が多額の銀を投じて生糸の買占めを計ったこと、文禄3年（1594）3月に輸入鉛などの買付けのため蔵米1万3000石

を銀に代えて長崎に送らせ、次いで慶長2年（1597）にはルソンから長崎に帰航した商船に致命を下して、その舶載したルソンの壺を一手に独占的に買占めを計ったことなど、日本とルソンとの交易が相当活発であったことを示している。であるから、日本人も多数フィリピンに居住しており、1598年（慶長3）6月のマニラ総督フランシスコ・テロのフェリペⅡ世宛の書簡に、「我々には、つねに日本の脅威がある。日本が撤退してくれることを望む。……日本人が当地に沢山いることがわかり、追放することにした。8000人以上を追放したし、追放を逃れたものをマニラに集めているところである。日本人は原住民に対して、悪い風習を教えている⁴⁵⁾」と、フィリピン人の反乱を日本人のせいに行っているし、また秀吉の入貢を促がす書簡即ちフィリピン侵略計画として、現地のスペイン人には大まじめに受けとられていたのである。

この頃の中国との交易は、中国からは絹・麻・綿・陶磁器などがフィリピンに入り、これはメキシコを経てスペインへもたらされた。逆に大量の銀がメキシコからルソンに入り、フィリピンを素通りして中国へ流れて行くといったように、フィリピンは重要な中継地としての役割を果たしていたのであるが、中継地としてのフィリピンはうるおうことがなかったといわれる。前記マニラ総督の書簡に、「毎年、大量の銀がメキシコからここへやってくる。だが、これは異教徒の中国へまた通過していってしまう。……異教徒中国人と原住民の接触はこまる。中国人は勤勉で、原住民は怠惰。そのため経済は中国人が握ってしまう⁴⁷⁾」等とある。

「朱印船貿易史」「新版朱印船貿易史の研究」及び投銀資料により、日本からルソンへの渡航朱印船を記す。

慶長9年（1604）	6. 6	伊丹宗味
〃 〃 〃	7. 5	平野（末吉）孫左衛門
〃 〃 〃	8. 18	安当仁カラセス
〃 〃 〃	8. 26	田那辺屋又左衛門
〃 10年（1605）	5. 11	浦井宗普
〃 〃 〃	9. 1	安当仁カラセス
〃 〃 〃	9. 3	田那辺屋又左衛門
〃 〃 〃	9. 上旬	平野（末吉）孫左衛門
〃 11年（1606）	8. 12	林三官
〃 〃 〃	8. 15	平野（末吉）孫左衛門
〃 〃 〃	9. 15	安当仁カラセス
〃 12年（1607）	6. 2	西類子
〃 〃 〃	6. 26	小西長左衛門
〃 〃 〃	〃	松浦鎮信
〃 〃 〃	〃	平野（末吉）孫左衛門

慶長14年 (1609)	正月11	平野 (末吉) 孫左衛門
" "	" "	小西長左衛門
" "	孟冬11	安当仁カラセス
" 15年 (1610)	正月11	長谷川権六
" "	" "	平野 (末吉) 孫左衛門
" 16年 (1611)	正月11	平野 (末吉) 孫左衛門
" "	7. 25	西類子
" 17年 (1612)	8. 8	西類子
" 18年 (1613)	正月11	村山市藏
" 19年 (1614)	正月11	小西長左衛門
" "	" "	シンニョロ・マルトロメティナ
" "	" "	木津船右衛門
" "	4. 8	西類子
" 20年 (1615)	正月16	木津船右衛門
元和元年 (")	9. 9	島津忠恒
" "	9. 9	木屋弥三右衛門
" "	" "	シンニョロ・マルトロメティナ
" "	" "	西類子
" 2年 (1616)		マヌエル・ゴンサルヴェス
" 5年 (1619)	9月	西類子
" 6年 (1620)	1. 10	末次平藏

- 元和9年 (1623) 徳川幕府, 日本人のルソン渡航を禁止。
- 寛永元年 (1624) 徳川幕府, マニラの使節を拒絶し, スペインと断交す。

第2章 台湾への航海及びゼーランディア城

第1節 台湾と日本

長崎実録大成によれば, 「異国渡海御免の事」として, 文禄の初年 (1592) より長崎・京都・堺の者, 御朱印を頂戴して広南・東京・占城・東浦塞・六昆・太泥・暹羅・台湾・呂宋・阿媽港等に商売のため渡海すること御免これ有り。

長崎より5艘	末次平藏	2艘
	船本弥平次	1艘
	荒木宗太郎	1艘
	糸屋随右衛門	1艘

京都より 3 艘	茶屋四郎次郎	1 艘
	角倉	1 艘
	伏見屋	1 艘
堺より 1 艘	伊予屋	1 艘 以上

とあって、台湾へも朱印船時代の初期から交易船が出ている。この頃の台湾の産物は、第1章で述べたように、「鹿は世界中のどこよりも数が多く……（鹿）皮はここから約245マイル離れた日本に向けて送り出され」たのであった。

もともと台湾は、朱印船時代の前即ち倭寇の時代、呂宋助左衛門の例にみるように我国の貿易船が盛んに海外に出始めた頃、中国は嘉靖の大寇期に当っており、中国の「寇（海賊）と商（人）とは同じく是れ人なり、市（貿易）通ずれば則ち寇変じて商となり、市禁ずれば即ち転じて寇となる（江南経略）」、また「陽には即ち商を称し陰には即ち寇を為す（日本一鑑）⁴⁸⁾」とあるように、中国人と日本人が別々に或は共同して台湾に渡り、ここを根拠地として半賊半商のかたちで中国沿岸に出没していたものである。

天正15年（1587）秀吉はキリスト教を禁止し、イエズス会の日本退去を命じ、長崎・浦上・茂木を没収し、その翌天正16年（1588）長崎旧教会領の代官に鍋島直茂を任じ、長崎支配の条目を定め、倭寇禁止令を出す。この年1588年は、6月に当時世界最大の海上戦力であったスペイン無敵艦隊（アルマダ）Invincible Armada がイギリス海軍の活躍と暴風で壊滅し、制海権はスペインから去り、スペインと独立闘争中のオランダは事実上独立して、これがスペイン衰退への転換点となった年であるが、この翌17年（1589）秀吉は松浦鎮信に海賊の捕縛を命じている。また天正19年（1591）には証明計画を発表して西国諸侯に肥前名護屋城の築城を命じ、この年原田孫七郎をフィリピンに派して入貢を促している。文禄元年（1592）には朝鮮に出兵し、原田喜右衛門をフィリピンに派遣して再び入貢を促し、同年長崎奉行を設置し、この年朱印船制度を始めたとされている。そして文禄2年（1593）に蛸崎慶広に蝦夷島管理を命じ、同年台湾に対し入貢を要求する。

こうしてみると、秀吉は陸上の天下統一を見るや西国の倭寇（水軍）を禁止すると共に、織田信長以来自らの力となってきた瀬戸内と熊野の軍を以て水軍を編成し、海外貿易もまた自らの手で管理しようとしたもののようである。台湾の入貢を求めた文書は原田喜右衛門が携えて行ったといわれるが、本書は加賀前田侯家に保存され、現在宮内庁所蔵となっている由である。下って慶長14年（1609）有馬晴信が部下を台湾に派遣しているが、徳川幕府もまた台湾を中国貿易の中継地とし、出来れば自己勢力下に置いて、交易を幕府管理のものとす意図があったものと思われる。

耶蘇会の1609年・1610年の日本年報によれば、「公方はまたフォルモサ島と和親を結び、貿易を開かんと試みたり。……公方の目的は利慾に外ならず、該島に一港を得ば全領土に利益あるべしと信じたるなり。故に船数艘を彼地に遣はし、……然るにその結果は全く予期に反し、彼地の人は野蛮にして、外人を敵視（独り支那人に対しては然らず、現に貢を納

め居れり)せるが故に、渡航の日本人は虐待を受け、隊員の殺戮されたる者を遺棄し……⁵⁰⁾…」とある。

引続いて徳川幕府は元和元年(1615)9月9日、長崎代官村山等安に「高砂国」行きの朱印状を出している。資料によれば、これは台湾征討のものであって、翌2年(1616)4月にも等安は再び幕府の諒解を得て、次子秋安(ジョアン)・部将明石道友に対し、部下の士卒を率いて兵船13隻に分乗し台湾征討に赴かしめている。⁵²⁾これに関し英人リチャード・コックスの平戸イギリス商館日記1616年5月5日に、「長崎の等安殿の息子(The sonne of Juan Dono of Langasaque)が軍兵を乗せた船13隻を率いて、高砂、われわれのいう台湾島(iland Taccasange, called per them soe, but by us Isla Fermosa)を占領するため出航した。彼は目下、五島(at Goto)にいて、都(Miaco)からの援軍を待っており、琉球(Lequea)へ行って秀頼様を探すつもり(to look for Fidaia Samme)⁵³⁾だともいわれる」とあり、また1616年7月7日の日記に、「等安の家来の船が1隻(one boate of Twans men)台湾の入江をさかのぼって更に奥地を調査するつもりであったところが、不意に土民から襲われ(were set on by the cuntrey people)、所詮逃げられないと分かると、敵の手に陥りたくないで切腹した(cut their owne bellies)⁵⁴⁾という噂である」と。明実録には丙申(1616・元和2)「……而長岐(長崎)之酋、日等安即桃員者、以他事得罪、家康之滅之也。乃力請、取東番(台湾)以自贖、是以、……而等安次子実来会、……等安乃復繕舟厲兵……因酋長等安遣其子秋安、謀犯鷄籠・淡水、屢失利、不敢歸島、復遣桃煙門等、覓之、随以来獲住泊五島、至今年四月、駕至浙台地方、衝過彼寨兵船打破旋奪大船一隻、又于海門東西機与余千等衝、敵殺元伊兵……⁵⁵⁾…」とある。鷄籠は台湾の鷄籠山のことから鷄頭籠(台湾)を指し、淡水は台湾北部の港である。

1616年(元和2)7月12日付のリチャード・コックスの書簡に、「東安がファーモサ島を征服するために派遣したる諸船は、その目的を達せず、(その企画が到着前に発見せられたるため)1艘の小船とその中に在りし者を悉く失えり。彼等は島人に囲まれて逃る途なきを見、そのため他の者も入ることを敢てせず、支那の海岸に赴き、そこに1200余の支那人を殺したり。而してその会せる小舟又はジャンク船を悉く拿捕し、乗組員を海中に投じたり。これがため、今年支那ジャンク船は1艘も日本に來らざるべしと思わる。因て長崎の支那人等は、この事につき皇帝(将軍)に申告せんと決心せり。或は東安がその生命とその有するもの一切を失う動機となり得べしと考えらる⁵⁶⁾」とあって、明実録を裏書きし、且つその後代官村山等安と末次平蔵の不和が表面化し、「元和2年興善の子平蔵その旧債を責む。東安顧みず、終に官に訴え、皆江戸に召さる。対審に及び平蔵、辞屈す。即ち東安が大坂に通じたる密事を告ぐ。初め東安が子某天主教を修むるに座し阿媽港に放たる。東安中途に於いてひそかに之を奪う。又去年(元和元年)これを大坂に籠城せしめ、又、玉薬を輸送せり。是を以て東安は江戸に斬せられ、一家13人は長崎常盤崎に磔せられ、家亡ぶ⁵⁷⁾」とあり、その斬罪は元和5年(1619)11月である。

元和2年の、村山等安以後の日本から台湾渡航船を岩生成一氏資料⁵⁸⁾及び投銀資料によって記せば次の通りである。

- 元和3年（1617）支那カピタン李旦船，同華字船
- 〃 4年（1618）支那カピタン李旦船3隻，某支那人船
- 〃 6年（1620）長崎中町支那人医師二官船
- 〃 7年（1621）支那カピタン李旦船3隻
- 〃 8年（1622） 〃 李旦船，日本船3隻
- 〃 9年（1623） 〃 李旦船，平次平蔵船，日本朱印船
- 寛永元年（1624） 〃 李旦船
- 〃 2年（1625）末次平蔵船，日本朱印船（平野藤次郎船）
- 〃 3年（1626）末次平蔵船（浜田弥兵衛乗船），平野藤次郎船（中村四郎兵衛乗船）
- 〃 5年（1628）末次平蔵船（浜田弥兵衛乗船）2隻
- 〃 8年（1631）松浦隆信船，日本船4隻，朱印船1隻，長崎の武左衛門船ほか2隻
（北部台湾に）
- 〃 9年（1632）日本船3隻（淡水に）
- 〃 10年（1633）日本船3隻

第2節 ゼーランディア城

オランダの独立はスペインの悪政と新教徒抑圧に対して、主にネーデルラント（現オランダ・ベルギーの領域）の新教徒が反抗し、1581年に独立を宣言したのであるが、1588年にスペイン無敵艦隊が壊滅し事実上の独立は達成されたものの、その後もスペインとオランダの間では戦争状態が続いていた。しかしスペインはオランダを屈服させることは到底望めないとして、1608年春、委員をハーグに特派し、現状維持を条件として12年間の休戦条約を締結する交渉を始めた。これが1609年（慶長14）に成立した。一方、イギリス・オランダの両東インド会社は、アジア海域に於て貿易の利を争い、且つ両国の船舶は南洋の海上及び我国の沿海と平戸に於ても闘った結果、前記オランダ・スペイン間の休戦期間満了以前の1619年（元和5）6月2日、ロンドンに於てイギリス・オランダ両国の防衛条約 Treaty of Defence が締結され、英蘭連合艦隊 Fleet of Defence はポルトガル人又はスペイン人を襲撃する動きを始めた。

この英蘭同盟の成績は余り良くなく、1622年8月（元和8年7月）に連合艦隊を解散するのであるが、呂宋島マニラのスペイン政庁は英蘭連合艦隊のためメキシコからくるスペイン船舶を襲われ、且つ中国大陆からの支那商船の渡来をも妨げられたので、台湾島の1港を根拠地として英蘭艦隊に対抗して対中国・対日本の貿易を確保するため台湾を占領すべく本国

政府に建議した。ところが1621年（元和7）11月・12月の頃、オランダ側によってマラッカに渡航するマカオとマニラの船が捕獲され、この台湾占領計画は知られてしまった。

オランダもまたバタビアと日本との間に中継基地の必要を痛感していたので、オランダ単独でマカオを襲撃し、もしこれを攻略出来なければ澎湖島か台湾に根拠地を求めることとして、コルネリス・ライエルセンを艦隊司令官とし艦船8隻を以て1622年4月10日バタビア港を出発せしめた。⁵⁹⁾航海中他の4船が艦隊に加わり、6月21日マカオ近海に到着し、6月24日マカオ市を攻撃して600の兵を上陸させたが、⁶⁰⁾ポルトガル側の要塞が善戦したため多数の死傷者を出して失敗に帰した。その後、3船をマカオ港外に留め、また2船をマニラから帰航する支那船舶を捕獲する目的で厦門附近に航海せしめ、本隊は澎湖島に直航し、1622年7月11日馬公の港に入った。⁶¹⁾

ライエルセンの日誌によれば、「7月11日、月曜日朝、諸船帆をあげて湾に向い、正午スヒップ船ジーリクゼーは8尋の粘土質の所に碇泊し、直ちに小艇にて小堂に向いて漕進し、小堂を守る支那人3人を発見せり。又同所にて山羊及び豚数頭・牛4頭を見たり。島の北側には多数の漁夫居住すといえり」。

「7月12日、火曜日朝、ヤハト船デン・ハーン、ビクトリア及びデ・クライネ・ホープを小堂に近き砂湾に派遣し、同所にて船を掃除し、又各船に水を汲入れて出帆準備を整うることを命じたり。又兵士数人を率いて島々を視察し、城塞を築くに最も便利なる地を求めたり。西の島に到りて西方の1湾に前記のジャンク船5～6艘碇泊せるを認めしが、我等はわずかに6～7人に過ぎざるを以て、彼等に接近するを不利なりと考えたり」。

「7月13日……ジャンク船のなお附近に在るを発見せしが、支那人は彼等（ナイエンローデ外）を認め、皆ジャンク船に逃げ込みたり。ナイエンローデ君（村上訳ではニウローデ）は平和旗を以て合図をなしたれば、これを見て数人は再び上陸し、ナイエンローデ君及びザール君と会談し、我等は此の如き多数の船を率いて何を為さんとするかと尋ねたり。之に対し支那人に貿易を求め、又当島に適當なる場所を得て滞在せんとすと答えしが、彼等は別に何も答えず、その首領に伝えんため再び船に漕ぎ帰りしが、首領は直ちに上陸しナイエンローデ君及びザール君に大いに好意を示し、我等が此地を去り、フォルモサ島に赴かんことを請い、同地には我等に便利なる港ありと言ひ、水先案内を附したるジャンク船1艘を貸すことを申出で、明日ジャンク船にて我等の許に來り、予と直接これに付き会談すべしと約束せり」と。また、「7月27日、水曜日朝、我等はフォルモサ島に向け航走し、正午頃タイオワン港の北約2哩の辺にて島に接近し、同港に向いて走りたり。附近の港に來りて予は測量のため小艇にて先発せり。……小艇にて港内に進入せしが、その辺の水深10呎乃至12呎に過ぎざりき。但し最低潮時なりき。内に入りて水深6～7乃至8尋にして船舶の碇泊に便なる所あるを発見せり。湾は廣大にして長さ約3哩なるが概して深からず。但し湾の入口の辺には船の碇泊すべき円形の魚筌状（筌は漁具、やな）の所あり。広さゴテリング砲の着弾距離、深さ10尋又は8尋乃至5尋なり。湾の入口の幅は大綱（204m）の長さ程あり、兩岸の間は深さ10

尋乃至11尋、港外の洲の上は前記の如く10呎乃至12呎にして、洲の長さは $\frac{1}{2}$ 哩、また幅は大綱の長さなり」。

「(1622年) 7月28日、木曜日……海岸に沿いて同所（高雄の南、琉球嶼^{リウチウ}を指したものでらしい）に向い、正午頃島の下方28尋にして陸より大綱の長さの処に碇泊せり。島は肥沃なりと見え、多数の椰子樹その他生じ、又耕地あるを見たるが、人は1人も見ることを得ざりき。兵士数人を率いて上陸せんとせしが、通訳の支那人は同行するを欲せず、同所には400人以上居住せるが、凶暴なる食人者にして、人を認むれば常に隠る。3年前には支那人100人余を殺したりといえり」。

「7月29日、金曜日……再びタイオワンを測量する事に決し、夜半同所に着きたり」。「7月30日、土曜日朝、天明と共に港に入りしが、前記の如く港内の水は最干潮時12呎なるを発見し、満潮時には15～16呎となるべしと算定せり。此辺は海岸に砂丘多く、そこここに叢林あり。内地の高所には樹木並びに竹の少しく生ずるを見たり。但し之を得ることは甚だ困難なり。もし材料得らるれば港口の南側は城を築くに適せり。ここに城あらば船舶の入港は困難なるべし。この港は日本人が毎年ジャンク船2～3艘にて渡来し、貿易を行う所なり。（支那人の言に依れば）この地には鹿皮多く、日本人はこれを土人より購入せり。また支那より毎年3～4艘のジャンク船、絹織物を積み来りて日本人と取引せり。我等は何人をも見ず、ただ漁船1艘を見たるが、これと語ることを得ざりき。この港はポルトガル人がラマン Lamangh と称する所なり。本日、本船に帰りたる後、フォルモサ島に於ては、澎湖の大島より便利なる地を発見すること能わざるが故に、我が船舶の処に帰ることに決し、当夜ヤハト船2隻、わが船舶の処に着きたり」。

「1622年8月1日……（澎湖島）攻囲を受ける場合に、新鮮なる水の供給を受くること困難にして、薪及び材木は少しも得られざれども、司令官及び大評議会はわが城を澎湖諸島の主要なる当島の南西の突端に置き、直ちに工事に着手することを神の名に於て可決確定せり。この島は……チンチウ Chincheuw（漳州か）より東南18～19哩、タイオワンの西北西約10哩にして、諸島中最も便利なるのみならず、又ポルトガル人或いはイスパニア人がこの地を占領せんとして来る場合、我等はチンチウに近く、且つフォルモサ島に面し、その最も便利なる港を扼することを得、またタイオワン航路に当れるの利益あるが故なり」。

このような経過の後、澎湖島のオランダの城は1622年8月2日から工事を始め、9月31日には守備兵を入城させた。⁶²⁾

さて、澎湖島に築城を決定した直後の8月7日、司令官はハンス・ファン・メルデルトに命じ、中国貿易を開くべく対岸に渡航せしめたところ、9月29日に中国役人が澎湖島に來航し、福建省総督のオランダ人澎湖島撤退要求の回答を行なった。そのときオランダ側の貿易希望の質問に対し、中国役人は淡水（台北の河口）に行くことを勧めた。その10月中旬、司令官はかねてバタビア総督から澎湖島固守を命ぜられていたため、この上は威嚇攻撃を行

このようにして、オランダ側はかなり強引に澎湖島を根拠地としたが、第1章第1節で述べたように、中国官憲は澎湖島までは中国領土、フォルモサは「支那の領域外」とする意識であって、オランダ側は一旦はタイオワンを測量した上で澎湖島が水の供給不足・薪及び材木供給不能という条件は承知しながらも、要塞としての適地と認め、ここに築城した。ところが中国官憲はあくまでも澎湖島撤退を要求し、或は台湾北部の淡水に行くことをすすめ、或は「他の場所」として暗にフォルモサをすすめ、1624年に入って中国側が澎湖島に兵4000人・兵船150艘を集め、更に増強して兵10,000人となった時点では、「澎湖島を去ってフォルモサ島に在るタイオワンを居処と定むる時は、貿易は同地並びに（オランダ東インド）会社員の駐在する他の場所に於て許される⁶⁴⁾」として、明確にタイオワンへの移転を強く要求した。

この時点でオランダ側は、「更に考うべきは、支那人が既にタイオワンに於て日本人と盛んに貿易を行ない始めた事にして、我等も同地に居を定むれば、これを防止することを得べく、もしこれをなさざる時は故カンプス君（元平戸商館長）の説きたるが如く、日本に於ける生糸貿易に期待せる利益を失うに至るべし」とあって、第2章第1節の日本から台湾渡航船の表にみるように、長崎から末次平蔵船など続々とこの島に渡り、中国船も海禁が解

サツカム (赤坂)

ラキエムイ (龍耳門) 水道

バクセムボイ (北線尾島)

ゼーブルフ砦

ゼーランディア城

ユトレヒト砦

タイオワン島

台江

ゼーランディア市

プロヴィンシア

タイオワン地図（バタビア日誌(上)，62頁図を一部修正）

かれた後の航海自由放任時代にあって活発に動いている状況下であり、⁶⁵⁾台湾が日・中交易上の要衝となりつつある現状をふまえ、交易に後れをとることがないようオランダ側はタイオワンへの移転を1624年8月18日に決定した。

1624年（寛永元年）は、荒木宗太郎が安南国王の娘王加久戸売を妻とし、またキリシタン弾圧のため懸賞訴人の制が布かれて元和の大殉教となり、金鐔次兵衛がマニラに潜行したそれぞれの2年後に当り、モルッカ（香料）諸島に於てオランダがイギリス商館員（日本人を含む）全員を虐殺した2～3月のアンボイナ事件と11月に平戸イギリス商館が閉鎖し、また日本人のルソン渡航禁止となった1年後であり、そして徳川幕府がマニラからの使節を拒絶してスペインとの断交を行なった年であり、後にこのフォルモサ島と深いかかわりをもつ鄭成功が平戸で誕生した年である。この頃、中国の海寇顔思齊を援けて鄭芝龍が台湾を根拠とし、或時は寇となり、或時は商となって活躍していた時期に当り、また10数年前シャム国に渡った山田長政が大活躍していた時期に当たっている。

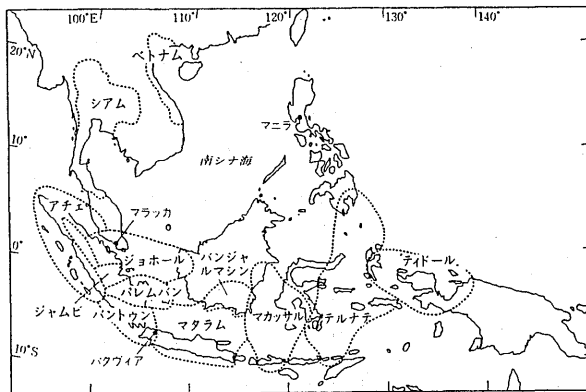
さてオランダは1624年8月26日に澎湖島の設備一切を破壊し、⁶⁶⁾同年9月始めにタイオワンに移転開始した。商館を最初北線尾島に設けたが、⁶⁷⁾翌1625年1月始めに対岸の赤嵌 Saccam のシンカン（新港）Sinckan の土人から、カンガン cangan 布15を以てその土地を買受けて砦を設け、会社の宿舎・倉庫・病院等を建て、支那人の移住を奨励し、オランダの連合七州を記念してプロビンシア *Provintia* ⁶⁸⁾と命名した。タイオワン島の築城は石とレンガが十分に得られないため、先ず板と砂を用いた仮城とし、後、100呎に140呎の四周堅固なる石壁——一番厚いところで6呎、幕壁は4呎の厚さ、約3呎の高さの薄い小胸壁——を以て8年4ヶ月後の1632年末に竣工した。城名は始めオラニエ（オレンジ）城といったが、1627年にゼーランディア *Zeelandia* と改称された。またタイオワン島の北の水道を扼するため1627年に起工した北線尾島の砦も完了して、ゼーブルフ *Zeeburg* と命名された。因みに1626年頃にスペイン人の作成した「フォルモサ島におけるオランダ人の港の描写」なる鳥瞰図によれば、北線尾島の対岸に3棟の長屋を描いて「日本人の村落 *lugar de los Japoneses*」と記し、⁶⁹⁾更に同所にはまたシナ人51,000名と日本人160名がいると書き入れられている。

1624年12月13日にタイオワンを出帆し、1625年1月3日バタビアに着いたヤハト船エラスムスは生糸6177斤半・絹織物数種を塔載していたが、この時点ではオランダが澎湖島に城塞を築いていた当時の福州都督との間の1623年11月の1ヶ月間の仮協約、⁷⁰⁾即ち支那人はオランダ人の持参せる資本に相当する商品及び絹織物をタイオワンに持渡ること、等の内容は今も有効であるということが1625年1月3日のバタビア城日誌に出ている。なお1625年1月28日にはスヒップ船ホルランヂヤなど3隻は、積荷を満載してバタビアからオランダ本国向け出帆したとある。また1625年3月24日にはタイオワンからバタビアへ、ヤハト船アルネモイデンがシャム及び日本の米84ラスト・・生糸3800斤等を搭載して着港し、同時にタイオワンに於てオランダが購入したジャンク船1艘も日本米1000袋を積んで到着したとある。

米に関しては1625年4月9日ヤハト船ビュルメントがタイオワンから日本米2300袋・生

糸7100斤・絹織物若干と共にバタビア着港とあり、1625年12月21日にも日本よりスヒップ船ウット・ワーペン・ファン・ゼーラントが米・小麦・豆及び小麦粉並に日本銅を積んでバタビア着港、1626年2月2日スヒップ船ジークゼーが日本から米・豆・小麦粉及び小麦10,000袋・銅190176斤等を満載してバタビア着港。1626年3月4日スヒップ船ウット・ワーペン・ファン・エンクホイゼンが日本から米11286袋・豆500袋・小麦粉367袋等を積んでバタビア着港などある。日本からの輸出品に関しては、「朱印船貿易史」「朱印船貿易史の研究」等に麦・麦粉・大豆は記録されているが、米の輸出記録はない。またこの時期の台湾は輸出する程の米の生産はなかった。この日本米の輸出は或一時のものと思われる。

17世紀頃の東南アジアは、第2次大戦前のオランダ領東インド（現インドネシア）・フランス領インドシナ（現ベトナム・ラオス・カンボジア）・イギリス領マレー（現マレーシア・シンガポール・ブルネイ）・アメリカ領フィリピン等ではなく、次の図にみるようになりに大きな各王国があった。従って当時のマラッカ・バタビア・マニラ、そしてマカオ・タイオワンなどは面に対する点でしかなかった。マラタムなど各王国がポルトガル・オランダ・イギリスなどの西欧諸国の進出を或程度受入れたのは、各国王は夫々の王国の貿易の独占を目指しつつ、国王自身の富の蓄積を計り、西欧諸国との交易を希望した結果であった。



17世紀中頃の東南アジア（生田滋氏による）

このような現地王国内のトラブル及びオランダ東インド会社と王国とのトラブルがあって、かなりの期間は日本からも米を買付けていたのである。

このようにオランダは中継基地としてのタイオワンにゼーランド城を築いたのであるが、台湾南部を領有視したための関税問題が後にタイオワン事件となって行く。

第3章 ノイツと浜田弥兵衛の事件

第1節 タイオワン長官ノイツ

タイオワン長官マルチヌス・ソングが1625年9月、タイオワンの川の入口に於て乗船が沈没したため溺死し、後任のピーテル・ノイツは1627年4月10日オランダ本国よりバタビアへ員外インド参事会員として到着し、同年5月12日（寛永4. 3. 27）タイオワン向けバタビア市を出発した。当日のタイオワン向け船舶はスヒップ船ヒュースデンとヤハト船スローテン、アウエルケルク、クレーン・ヒュースデン、ゲダの5隻であり、乗船は海員240名・兵

士60名の計300名であった。また同年6月28日（寛永4．5．15）支那ジャンク船6艘を護衛したヤハト船デン・ハーンとウエスト・カッペルの2隻も海員120名・兵士25名の計145名を乗せて、護衛終了後タイオワンに赴くべく出発した。何れもタイオワンの兵力増強が目的⁷¹⁾であった。

当時台湾周辺の海域では、海賊一官（鄭芝龍）がジャンク船1000艘を擁して屢々陸を襲い、陸上20哩の地まで土人を逐い、厦門及びハイトンを占領して破壊焚焼するなど荒しまわっていた。前記1627年6月28日バタビアを出帆したヤハト船ウエスト・カッペルも日本銀26000レアルを搭載して平戸からタイオワンに向っている途中で海賊のために捕獲されたという。⁷²⁾

なおフィリピンのスペイン人が台湾占領を計画したことについては前に述べたが、この建議は1621年11月～12月の頃、マラッカに渡航するマカオ及びマニラの船がオランダ側に捕獲されたことから沙汰止みとなっていた。ところが1626年（寛永3）2月始め、「日本に於てはマニラの人がタイオワン出征を計画し、北の季節風の終る前に大軍を率いて同所に在る我が（オランダ）国人を攻めんとする準備を急げる由、風説しきりなり。右はタイオワンに在る我が国人をして、その船舶を同所に留めて、マニラに向う支那ジャンク船の追撃に用うることなからしめんとする計画なるか、又は真実タイオワンに向わんとするものなるか」とバタビア城日誌もこれを記している。果せるかなスペインは、1626年5月台湾北部のキールン（鶏籠・基隆）を占拠し、サン・サルバドル城を築いた。

さて、タイオワン長官となったノイツは、長官ソソク時代の1625年7月、日本人の台湾積輸出品の10%課税と生糸の押収、及びソソク溺死後の後任とされていたデ・イットによる1625年（寛永2）・1626年（寛永3）の末次平蔵船と平野藤次郎船毎年2隻ずつの資金計37万デユカットの自由行使不承認と、ジャンク船2隻借用申込みの拒絶等⁷⁴⁾を事務上引継いだ形で長官となった。末次船と平野船は寛永3年末を台湾に於て空しく越年せざるを得ないこととなってしまっていたのである。

この紛争は幕府の知るところとなり、新平戸商館長となったコルネリス・ファン・ナイエンローデは、幕府からこの事件に関する注意を受け、バタビア本庁に対し輸出税徴税の一年中止と日本への特使派遣方を要請すると共に、日本人はオランダ人よりも早く台湾に渡航し手を着けていたので特別権利を要求するものであるということも上申した。⁷⁵⁾そこでバタビア総督はノイツをタイオワン長官に任命すると共に日本への特派大使としたのであった。

さて1627年5月12日バタビアを出発したノイツは、タイオワン到着後同年7月24日（寛永4．6．12）日本へ向かい、同年8月1日（寛永4．6．20）平戸に入港し、風を待って14日後の8月15日に平戸を出帆している。平戸商館に居た間にノイツは、タイオワンからのジャンク船2隻が長崎に着き、末次平蔵の船頭浜田弥兵衛が台湾の原住民数人をひそかに連れて来たこと、平蔵はこの住民達を皇帝（將軍）の面前に連れて行くつもりであること、これはオランダ側にとって不利になるであろうとの予感を感じとっている。⁷⁶⁾ノイツはタイオワン出発前にデ・イットにオランダ船舶によって日本商人の為の商品を支那から取寄せることを

指示していたが、デ・イットがその指示を実行しなかったので浜田弥兵衛は報復の手段としてタイオワンの新港の土人16名を誘って船に寄せ、オランダ人の横暴を幕府に訴えんとしたものであった。⁷⁷⁾

この間の事情を長崎港草は、「平次平蔵、商船を仕立て、彼地に渡し、大宛（タイオワン）にて小船を借り福州に渡りて糸端物など調えん為に船を乗り浮ぶるに、オランダ人これを見て大宛より80里ばかり沖に島あり名づけて澎湖という、紅毛（オランダ人）ひそかに船を此所に待ち伏せし、日本船の金銀を掠め取らんと賊船を寄せつけ、大勢ひたひたと我船に乗移る。何れも強力の盗賊という。多勢に無勢、かなうべきに非ず。その上我が邦へは何の音信も無ければ、ただ洋中何れの処にて破船して失いたるらんとするべし。かくては詮なきことなれば、ただ自分が掠み取らざる証拠の為にもなればとて大宛人を2人連れ来て帰帆し、かかる難にあいし趣を告げしかば平蔵大いに怒り云々」⁷⁸⁾。長崎実録大成には、「平蔵仕立ての船福州に差遣す処、オランダ人大勢押かけ、荷物・金銀等を奪取れり云々」とあり、或程度の紛争があったことは間違いない。

平戸オランダ商館日記によれば、末次平蔵が長崎奉行に提出した抗議文の要点は次の通りである。

- 「1. 日本の船が朱印状をもってタイオワンに来たにも拘らず、オランダ人は法令によってシナ人が日本人と取引することを禁じ、取引するものは処罰するといつて脅かした。
2. 日本人は生糸を買うために若干の代金をシナに送り、シナ人は品物を受取りに来るようと度々手紙を送った。その手紙はオランダ人の手に入り、彼等はそれを決して渡さなかった。
3. オランダ人は漳州の河口に常に船を置き、日本人が生糸を運び出して来ると、いつもそれを取上げて直接日本に持ってくる。等々」⁷⁹⁾

台湾のオランダ領有を認めぬ自由貿易志向の日本商人に対し、台湾領有を当然視し自己有利な管理貿易というオランダ商館側との貿易摩擦が原因であった、といつてよいであろう。

ノイツは平戸で14日間、大坂で上陸して京都で14日間を過ごし、1627年10月1日（寛永4. 8. 22）に江戸に到着したが、幕府は、「オランダ国王から日本の皇帝（将軍）に派遣されたのか、それともバタビアからか」「持ってきた手紙はオランダで書かれ、署名されたのか。それともバタビアか」「オランダ国とバタビアの王はどのような血族関係なのか。この使節もまた血族関係なのか」等々、バタビアから派遣されたノイツの資格と、総督から将軍宛の手紙とにこだわり、またその間に末次平蔵が江戸に着くまで待たされた。結局、ノイツは37日間江戸滞在を余儀なくされたあげく、1627年11月5日（寛永4. 9. 28）に将軍との会見を拒絶され、速かに帰国すべしと伝えられ、献上のため持参した4門の大砲は受取ってもらえず、但しこれは「我等（オランダ）の大なる味方なりと思わるる平戸の領主これを大坂に留置せしめたり」⁸⁰⁾という事になり、翌日江戸を発ち、大坂から乗船して12月3日（寛永4. 10. 26）平戸からタイオワン向け出帆した。

第2節 タイオワン事件

さて、翌寛永5年（1628）3月20日、浜田弥兵衛を船頭とする末次船2隻がタイオワンに到着した。⁸¹⁾永積洋子氏によれば、「同船には先の新港の住民の他、多くの武器・火薬を積み、取引に来たというより、戦争をしに来たように見えた。そこで長官ノイツはこの武器を差押え、新港の住民を抑留して枷にかけ、將軍から新港の住民への賜物をも取上げた。弥兵衛は交渉のため（ゼーランディア）城に呼出され、理由も知らされずに2週間抑留された。また日本人は生糸の買入れのためシナに船を出そうとしたが、近い中にシナからオランダ船が帰るから、それまで待てと拒絶された⁸²⁾」とあり、日欧通交史には、「その船頭には例の浜田弥兵衛が居るのみか、両船とも小銃・刀槍・弓矢等を多分に搭載し、乗組員も合計470人に上っている。然るにノイツはこの少し前に（平戸商館長）ナイエンローデから、平蔵殿は大坂で100人の兵士を募り、またそのジャンクには数門の大砲と200挺以上の小銃を積込んだ。前々長官が差押えた生糸は、本年是非日本人に返却するようにと注意した報告を受取っている。それで日本人は暴挙を計るのではないかと危惧し、先ず日本人の上陸を禁止し、交渉に来た弥兵衛等を抑留し、その間船中を点検して武器を取揚げ、帰帆の節返却すると称し、また便乗して来た新港土人を監禁し、彼等が携えた將軍の下賜品を押収した⁸³⁾」と、ほぼ同様の記述があり、長崎港草のはやや講談調で「弥兵衛思いけるは、未だ幾程ならずして我等彼所に渡海せば、彼等（オランダ人）は身に覚えあることなれば定めて疑を起し、左右なく船より下すまじ。謀の為に平蔵かかりの長崎村の百姓100人余、鍬・鎌などの農具を持たせ、農人の軀にもてなし、その上前年連れ来りし大宛人を案内にとり、碇をあげ、とも綱を解かんとするに、骨肉縁者はかけ出し永世の別れこれまでなり、ただ止めても止らぬは心なし、武門の家ならねば異国の地にかばねを埋みたればとて………声々に呼ばわりける、云々⁸⁴⁾」とあって、何れも何らかの武器を用意し、乗船の人員も多くして、始めからオランダ商館側と争うために渡航したかのような記述である。しかし武器輸出に関しては、長崎港草「末次平蔵滅亡」の項に、「延宝年中（延宝3年・1675）に、末次平蔵茂朝ひそかに船を仕立て、異国へ渡海せしめ、唐土泉州にて船底を二重に拵え来りて、刀・脇差50個、槍・長刀数十、日本地図等を以て商売しける趣露見しける。即ち延宝4年辰年正月9日御詮議を遂げらるるに申開くこと能わず、2月17日を以て平蔵に入獄仰付けられ、その財産は悉く關所の所分あり、云々」とあり、刀劔・槍・長刀・鎧などは日本からの輸出商品であったし、恐らく始めから戦うつもりではなく、和戦両用の備えをなして渡航したものであろう。

浜田弥兵衛は抑留されたゼーランディア城から船に戻って、留守中の顛末を聞き、「オランダ側に向ってしきりにその不法を非難したが満足の答を得ぬ。生糸を積込むため支那へ渡ろうと願ったが許されぬ」その間、「弥兵衛等と対談するに当り、ノイツは毎時も高い椅子に座り、足台に足をのせ、丁度足首が日本人の頭の高さにあるので、弥兵衛等はこれを傲慢無礼として切齒せざるを得なかった⁸⁵⁾」。浜田弥兵衛の頭の中は、幕府から御朱印状をもらっ

て渡航しているということと、タイオワンにはオランダよりも自分たちの方が渡航交易歴は古いのだという自負があった。

次に平戸オランダ商館日記（平戸第1輯，147頁以下）によって事件並びにその経過をみてみよう。

1. ノイツと浜田弥兵衛の事件

- (1)1628年6月29日（寛永5．5．28）に稀有且つ重大な事件が起った。日本人達は（彼等の言によれば）出発するための暇乞いに来て，その許可を求めた。長官がその申出を鄭重に断わると，彼等は少しも満足せず，甚だ断固たる語気で行発したいのだとはっきり申立てた。長官は，評議会がそれと異なる決定をしたから，出発してはならないと答えた。
- (2)この時，彼等は吼える獅子の様に長官に飛び掛り，彼の頭を押え，首の周りの飾り布で手足をしっかりと縛り，もし声を立てたら直ちに首をはねると言って脅した。
- (3)商務員ヤコブ・ホームンは，事の直前に部屋から出て行ったが，長官にまだ何かを尋ねるため部屋に戻って来てこの物音を聞いた。彼は直ちに引返し，長官が殺されると言って，人々に武器を取れと触れ廻った。
- (4)ここで始めて大騒動となり，広間の外にいた日本人数名もそのことを聞いてすぐに剣を抜き，広間の内外を見張っていた我々の兵士に飛び掛った。兵士達はこのことを予期して居らず，また銃に注意を怠っていたので忽ち追い散らされた。こうしてそのあたりは遂に全く一掃され，もはや抵抗する者はなかった。双方共死者が数人出，負傷した者もいた。負傷者の中には重傷の商務員ホームンも居た。
- (5)外へ出ると我々は直ちに兵士達を武装して来させ，要塞に配置した。その間2・3発の砲弾を日本人に向けて放ち，損害を与えた。私（ピーテル・ムイゼル）はペランダによじのぼり，長官の窓の前に達した。其処で私は長官が惨めにも縛られているのを見て悲しさと口惜しさのあまり涙が出た。
- (6)長官は我々に，「射撃を止める様に，止めなければ，きっと殺される」と哀願した。
- (7)日本人達は進んで私を部屋に入れ，もし射撃をやめさせないなら，直ちに長官の首を窓から私の足許に投げるだろうと伝えさせた。そこで私はすぐペランダから飛び下り，死の罰を以て射撃を中止させた。

2. タイオワン評議会と浜田弥兵衛のゼーランディア現地協定（平戸日記第1輯153頁以下）

1628年7月3日（寛永5．6．2）決定要旨

- (1)人質について，長官の子息（ラウレンス・ノイツ），指揮官ピーテル・ムイゼル，ファン・デル・ハーヘ，ハルトマン及びムールクルの5名を彼等（日本人）の安全の保証のため，日本人のジャンク船で日本へ送ること。そしてこれに対し，平蔵殿の甥柴田八左衛門殿・兵卒の頭西郷庄右衛門殿・パニヨウス即ち目付役山岡新左衛門殿・カピタン弥兵衛の子息浜田新蔵殿・商人の頭尾の道九郎右衛門を引渡すこと。これは

長官及び評議会の安全の保証のため、彼等（日本人）と共に日本へ向けて出帆するオランダのヤハト船で運ばれること。（オランダ側承認）

(2) (タイオワンの) 新港の住民11人（その中4人は逃亡した）については、2人のシナ人通訳と共に、彼等の住居を搜索し、日本人に引渡すか、又は完全な自由を与えること。（オランダ側承認）

(3) 彼等（新港住民）が高官達から受取った贈り物を、還付すること。（オランダ側承認）

(4) 我々（オランダ側）の船の舵は出発の時まではずし、陸に上げておくこと。（これについてオランダ側は意味を変更させる意向を伝える。しかし彼等（日本人）がそれに応じないなら、そのまま承認することにする）

(5) 彼等（日本人）は200ピコルの生糸 — その代金は以前シナに送られ、恐らく海賊一官（鄭芝龍）に奪われた — を要求し、なお（前々）長官ソクによって没収すると決定された15ピコルの生糸の返還を要求。（オランダ側は200ピコルの生糸の要求は不当で根拠がないが、日本貿易と長官の生命を考慮し日本側に渡す。但しこれは裁判官が日本でこのことを決定するまでの仮渡し of 形である）

※生糸は日本人に返され、その上、投銀の利子として200ピコルの20%が支払われることになった。そして日本に於て295テールで支払う筈の15ピコルについては、当地では141テールで渡すことになったので、投銀の利子は、これで殆ど儲け出すことになった。（前掲書、156頁）

3. タイオワンから日本へ、そして入牢（前掲書157頁以下）

1628年7月11日（寛永5. 6. 10）

4隻、即ち日本人の人質が乗っているヤハト船エラスムス号とオランダ人の人質が乗っている日本の末次船2隻と、オランダ側が貸した1隻のシナ船は朝早く（タイオワンを）出帆した。船長弥兵衛はヤハト船が末次船と一緒に航海して、平戸にではなく、長崎に直航し、そこで人質を交換するよう要求。（オランダ側は）ヤハト船を長崎に行かせることに同意したとは聞いたこともなく、知る由もなかった。ただ平戸に行き、そこで人質は家に帰り、我々も平戸に行く、とだけ聞いていた。……これは悲劇の始まりではないかと考えた。……（今や我々はこの野蛮人と航海しているのである）神よ救い給え。

7月15日（寛永5. 6. 14）

我々（オランダ側）は弥兵衛に、「何故長崎という言葉を書き偽って日本と訳したのか」と尋ねた。彼は答えた。「これは長官からの特別の依頼によって書かなかった。何故なら、この契約書を作成しようとしたとき、語句について多くの論議が出た。長官はヤハト船が長崎に行くことに同意しようとはしなかったが、日本人がこの点で少しも譲歩せず、頑なに変わらないのを見て、ヤハト船の船長に途中で抜け出すよう依頼することを決め、また私に対しては、この契約を承認するために、案文を送る際、出来る限り評議会が打撃を受けたり、弱気

になったりしない様に、またその他の考慮から、長崎という言葉避けてその代りに日本とすることにきめたのだった。このようにして先の契約書は評議会に送られ、この点について何も知らない中に承認されたのである」。

長官ノイツと日本人の間で結ばれた契約（日本側原案）

- ①…………我々と共に長崎に行く。
 - ② 5 隻の船の舵は陸に揚げられるだろう。
- （その他省略） （前掲書230～231頁）

1628年7月25日（寛永5．6．24）

長崎入港。我々（オランダ側）は船長（弥兵衛）を呼び、今我々は長崎に着いたが、どんな考えを持っているのか、吉か凶か、と尋ねた。彼はすべて吉兆ばかりであり、そのことは自分を見ればよく分るだろう、と答えた。（この日、5隻のポルトガルのフレガット船又はナベッタ船が12～13日前に積荷を満載してマカオから到着したと知った。4隻のジャンク船（2隻はチャンパ、1隻はカンボジャ、1隻はトンキンから）も到着していた）

1628年7月26日（寛永5．6．25）

昼頃、船長（弥兵衛）は再びジャンクに来て、平蔵殿やその他の人々の依頼により、ヤハト船（エラスムス号乗組員50名⁸⁶⁾）は旗を下ろし、我々のジャンク船のすぐ傍に着けるよう命令した。その通りすぐ行われた。…………ヤハト船も検査を受け、日本人の人質は釈放された。…………ヤハト船が検査されると、我々は平蔵殿の手下から、直ちに船の舵を引揚げ帆を外し、帆柱も取外して皆一緒に陸へ持って行くよう、また次の命令があるまでジャンク船に留まるよう命ぜられた。…………我々には厳重な番人がつけられた。即ちヤハト船の周りには小船があり、ジャンク船には兵隊が乗り込んで、一切の会話や文通は禁止された。又誰も船から出入することは許されず、ヤハト船に近づくことさへ許されてなかった。（オランダ人は、日本人の人質が下船したら、自分たちも当然解放されるものと考えていた）。

1628年7月27日（寛永5．6．26）

末次平蔵の家で、フランソア・カロンに対し、將軍の名誉な拝謁を受けた新港の住民がタイオワンに帰って、オランダ側に非常にひどい待遇を受け、枷にかけられた事についての質疑があった。

1628年7月29日（寛永5．6．28）

平蔵がオランダ側に伝えた日本側の箇条

- 1. オランダが將軍の朱印状を犯したこと。
- 2. オランダが將軍に歓迎された使節（新港の住民）を虐待し、枷にかけたこと。
- 3. 將軍が使節に与えた賜物をオランダが干渉し、取上げたこと。

1628年9月7日（寛永5．8．10）

昨夜は河内浦（平戸）に船が1隻入港したので、彼等は多くの船や人員を河内浦に送り、夜の中に船長と商務員を平戸のボンジョイ（役人）の所へつれて来て監禁した。

1628年9月9日（寛永5．8．12）

三蔵と弥兵衛が……平蔵殿が江戸から受けた命令を伝えた。即ち船長はヤハト船エラスムス号できた人々全員と一緒に通訳としてフランソアだけを残し、直ちに出発の準備をすること。我々（日本人）は彼等に7ヶ月分の現金を支給すること。その7ヶ月の間、彼等は当地（長崎）から10～12マイルの大村の屋敷に監禁され、同地の領主の監督の下におかれ、一方平蔵殿はその間に江戸から立ち戻り、我々の生命をどうするかについて最終的な決定を持ってくること、云々。

※9月17日～19日、ヤハト船の帆柱は外され、船は陸揚げされた。⁸⁷⁾

1628年9月20日（寛永5．8．23）

17人の水夫は島原という所へ向った。（前日、平蔵殿の召使の言では、「彼等（全部）が大村に行けば、お互いにいがみ合い、不愉快なことを我慢しなければならない。そこで——私が知る所では——他の場所へ送られることになった。そこには彼等のため、大村と同様な家が建てられ、大村と同様な自由が与えられる筈である」とある）

1628年9月20日、平戸にヤハト船ヒュースデン号到着。⁸⁸⁾

1628年9月29日、スヒップ船フレーデ号平戸着。河内浦に廻送。船の舵が陸揚げされ、帆が平戸に送られるまで彼等はそこにいなければならなかった。⁸⁹⁾

1628年10月8日（寛永5．9．11）

末次平蔵の家で日蘭双方の議論あり。

（タイオワンについて、「彼等（日本人）は常にタイオワンは自分達のものだと決めている」。「それは違う」と私（ピーテル・ムイゼル）は答えた、と。）

1628年10月10日（寛永5．9．13）

平蔵の家にて、平蔵からの要求。

「彼等（日本人）が我々に、平戸に於てこれまで享受し、又今後も認められると同様の自由な通商を、タイオワンに於ても許すことを条件として、総督は皇帝（将軍）にタイオワンの統治権を譲り渡し、これを放棄するよう、我々から総督を説得するように」と。（ピーテル・ムイゼル拒絶）

1628年10月21日（寛永5．9．24）

{

 ピーテル・ムイゼル（後に病死）、ヤン・ファン・デル・ハーヘ、ヤン・ハルトマン、

 アブラハム・ド・ムールクール、ラウレンス・ノイツ（長官ノイツの子息、後に病死）、

 フランソワ・カロン、カレル・ラウレンセン以下召使数人計14人大村着、監禁。
 }

※寛永5年（1628）、この年幕府はタイオワン事件によって平戸オランダ商館を閉鎖せしめ、オランダ船4隻を抑留している。この4隻はエラスムス号・フレーデ号・ヒュースデン号と

もう1隻であるが、これは1629年9月4日平戸入港のスヒッ船ズワルテン・アレント号が抑留⁹⁰⁾されているから、船の交替はあったようである。

さて、この事件の問題を整理して行ってみよう。

4. 事件の問題点

- (1) 先ずタイオワン長官ノイツについて、「誇り高い」「偉大な叡知と高い学識」「高慢と臆病」「恥すべき罷免を非常に巧みに糊塗する術を心得ている」「時が経つにつれて、すべてを彼の責任から逃れ、評議会のせいになっている」「東インド評議会では、身分の低い人が彼の上に立ち、云々」⁹¹⁾とあって、身分が高かった人物でもあるようである。
- (2) タイオワンの領有権・輸出関税10%について、バタビア政庁の1628年6月27日（ノイツ事件の2日前）、長官ノイツへの訓令として、「タイオワンに於ける権利及び主権に付きては、ノイツ君に命令して、何の制限なく、また日本人その他如何なる国民に対しても少しも譲歩することなく、会社のため之を維持せしめ、同地に来る日本人は十分親切に待遇し、同地に於て貿易することを望まば、海賊その他の敵に対して施すべき防備の経費を分担するに非らざれば、同地に於て貿易を中止せしむべし。

但し先ず思慮を用いて、彼等に対し事件の如何に成り行くかを見るべしと伝えたり⁹²⁾」とある。

- (3) 末次平蔵及び幕閣の考え方は、⁹³⁾「將軍の朱印状に対する侵害」「タイオワンへの交易は、オランダよりも日本が早かった」「オランダはタイオワンを勝手に領有した」「タイオワンの住民が台湾の統治権を將軍に捧げるために来日し、將軍に喜ばれた住民が虐殺された」「將軍からタイオワン住民に与えた賜物が取上げられた」「タイオワンに於けるオランダの日本人への横暴」「バタビア総督は、過ちの償いとしてタイオワン統治権を放棄し、將軍に譲渡すべし」「タイオワンの要塞が壊されれば、オランダ人の船はタイオワンと日本でこれまで通り平和に取引出来る」というもので、
- (4) バタビア総督はノイツ事件の2日前に平戸商館長に訓令して、「タイオワンの主権に付、皇帝（將軍）及び日本の大官と争い、これに関し最も卑賤にして且つ無学なる人の口により、総督の身分及び職務に不名誉を加えらるるを忍ばんよりは、むしろわが国人・船舶及び材料一切を日本より引上げんことを欲する旨、平戸の領主に通知すべき命令を発したり⁹⁴⁾と高い姿勢での交渉を指示しており、タイオワン事件について「（幕府）のノイツと弥兵衛の間で起ったタイオワン事件の公正な裁判⁹⁵⁾」を期待し、「オランダがタイオワンの要塞を壊せば、ルソンのスペイン人は直ちに同地に侵入し、地歩を固めるだろう。スペイン人は既に台湾島でタイオワンより適当で日本に近い港に一つの要塞（基隆・淡水）を作っている」「日本人はタイオワンに正当な権利を有しない」「タイオワンの要塞を破壊し、譲り渡すのは我々の権限になく、これは出来ない」「タイオワン事件は長官ノイツの行動が源である⁹⁶⁾」

このように、オランダ側は、タイオワン事件が長官ノイツと浜田弥兵衛の間で起ったこと、

オランダの人質を返さないことが幕府の公正な裁判によって解決出来る、と軽く考えていたようである。

ところが、日本側特に末次平蔵の論理は、將軍の朱印状に対する侵害、オランダのタイオワン領有の不当を以てするという国際的領土問題・国家主権への侵害という政治的なものであった。

但し、オランダ側も人質を取られており、日本側の論理に対する反論には、ややへりくだった譲歩をも含めてこれを無難にかわそうとする態度に変ってきたことが読み取れる。そしてノイツの高慢さ等個人的性格による行動がこの事件の根源であるとする主張を繰返すのであるが、これは永積洋子氏が「誇り高き反面教師」⁹⁷⁾又は「アジアでの経験のない新しい人」としておられるに拘らず、1628年6月当時のバタビア総督の、ノイツに対する指示は「多額の経費を要する艦隊を無益に維持することなからんため、2～3艘の適当なるヤハト船を福州に派遣し、同地に於て貿易を行うことを得ざるか調査し、又、フォルモサ島の北東角にある敵（スペイン）の要塞地鶏籠・淡水に各種商品を積み行くと伝えらるるジャンク船の航路を断ちて之を襲撃して捕獲せんことをつとめ、云々」⁹⁸⁾及び前出の「タイオワンに於ける権利及び主張については、何も制限なく……いかなる国民に対しても少しも譲歩することなく」とあり、1633年4月には、「支那人は如何なる外国人も沿岸に於て貿易を行うべからずとの旧法を遵守すべきが故に、自由なる貿易は武器の力を以て開かざるべからず。もし支那人に対し激しく戦い、マニラその他の地方より来るジャンク船は差別なく襲撃し、火と剣とを以て沿岸に臨まば、好条件を以て自由なる貿易を許すべし」⁹⁹⁾。1633年6月2日の、ブットマンズに対するバタビア総督及びインド参事会の特別訓令は、「……前記艦隊並に今後当地（バタビア）より派遣すべきものを用い、武力に依て支那貿易を開き、海賊ヤングラウを襲い、激しく支那沿岸を襲撃することを命ぜられたり」¹⁰⁰⁾。1634年2月1日の記録、「大なる支那ジャンク船1艘荷物を満載して当地（バタビア）に着きたり。同船は厦門島の西端に在るラケタインという町よりカンボチャに渡航せしが、^{チャムパ}占城の海岸に於てヤハト船ウィーリンゲンこれを抑留し、船員及び積荷を正当なる捕獲物と認定せり」¹⁰¹⁾。1634年2月19日の記録、「長官並びにタイオワン評議会員の意見によれば、貿易は武力及び過激なる方法を以てするに非ざれば獲得する能わず」¹⁰²⁾とあるように、基本的姿勢は武力による貿易の推進というものであったと言い得るし、ノイツがバタビア総督府と違った考え方・行動をなしたとは言えないであろう。

5. タイオワン事件の解決

- (1)1629年10月、ノイツはタイオワン長官を解任された。
- (2)1630年（寛永7）10月21日、ヤハト船ケンフェーン号で徳川幕府への総督の手紙・要求書を携えた司令官ウィルレム・ヤンセン、フランソワ・カロン等が平戸に着き、平戸侯を通じて江戸参府の許可を得、1631年（寛永8）3月に江戸に着いた。江戸では寛永8年4月に駿河大納言忠長の事件があって閣老との協議が遅れ、1631年5月21日（寛永8．4．20）

にやっと協議に入った。

その間に、この事件の強力な推進者であった末次平蔵が1630年6月24日(寛永7. 5. 25)江戸に於て¹⁰³⁾変死したといわれ、1630年12月29日(寛永7. 11. 26)にはノイツの子息は激しい下痢のため大村に於て¹⁰⁴⁾死亡した。

- (3)平蔵の死が事件解決の一契機になったことは間違いなく、1631年7月21日、二代平蔵茂貞がオランダとの紛争は亡父にのみ関係があり、自分は全く無関係と言明するに及んで幕閣の肩の荷も幾らか軽くなったようである。何となれば、慶長14年(1609)を境にして幕府は500石積以上安宅船禁制など、我国大航海時代の引きしめにかかっていた。であるから末次平蔵のおもわくに拘らず、台湾征服という考えに戻ることもなく、従ってタイオワンに関しては「タイオワンの要塞が壊されれば、オランダ人の船はタイオワンと日本でこれまで通り平和に取引出来る」という主張は平蔵の死後消滅したのである。

- (4)この間、バタビア総督に嘗て平戸の初代商館長で日本に10年余滞在していた知日派のヤックス・スペックスが就任し、ノイツをバタビアに呼び戻して一切の資格を奪って監禁し、一大決断を以て、1632年9月10日(寛永9. 7. 26)平戸着のワールモント号で元タイオワン長官ノイツを日本に護送した。

この頃タイオワンでは資金が非常に不足しており、且つ長期間平戸で空しく金を寝かしている情けない状況¹⁰⁵⁾下にあり、長崎では奉行竹中采女正がキリスト教弾圧の為に転宗者への毎日の墓参を義務づけ、また幕府は寛永8年(1631)6月、外国渡航商船に朱印状のほか奉書を交付するなど、管理貿易の度を務めていた時期に当たっていた。ノイツの日本護送は、平戸商館長ナイエンローデも全く予期してなく、江戸で交渉中のウイルレム・ヤンセンも勿論知らなかった。

- (5)閣老もバタビア総督のこの行動を、「これ以上適切な処置は考えられない」と称賛し、1632年11月12日(寛永9. 10. 1)閣老(土井)大炊殿・(酒井)讃岐殿・(永井)信濃殿・(青山)大蔵殿及び内匠殿の前で、大炊殿から平戸侯に、「タイオワンの過ちを最も善意に判断し、オランダ人を許し、出帆を希望している無実のオランダ人全員(大村・有馬に抑留中の者及び抑留船の船員等約220人)¹⁰⁷⁾を出帆させることに同意する」旨申し渡しがあった。これによって1628年6月末から1632年11月に至る4年4ヶ月余の空白期間経過後、日蘭国交は回復したのである。

○

○

この事件に関してはゼーランディア城に於ける日本側原案が航海先を「長崎」、オランダ文ではノイツによって「日本」とした二重契約的玉虫色の契約書の作成時から、身分の低い助手であって通訳として立会い、その後も江戸への交渉にも終始オランダ要人に随行し、後に平戸商館長にもなったフランソア・カロン及び前記総督ヤックス・スペックス等知日家の力が極めて大きかったわけである。但しオランダ東インド会社バタビア総督府の基本政策が前に述べたように武力による貿易の推進という方針の中にあって、当時の我国が信長・秀吉

を経て、1600年以後徳川による国内統一を遂げ、秀忠から家光へと幕府の強力にして毅然たる安定期に入っていたことが日本への認識を新たにさせ、より知日家でなければ幕閣と交渉するに値いしないことを自覚させたものである。従ってこれが宗教と貿易とを断ち切れぬポルトガルを退潮せしめ、逆に優秀な知日家を有するオランダ側が、ノイツのこのタイオワン事件に隠忍自重して名を捨てて実をとる交渉に当り、結果として所謂鎖国時代の日本に唯一の西欧貿易国として成功したということになったのである。これはこの事件が解決した1632年11月の後に於ても、バタビア政庁は中国に対しては依然として「自由なる貿易は武器の力を以て」の方針で臨んでいた事実によっても知る事が出来るであろう。

なお、抑留されていたエラスムス号は腐蝕して使用に堪えなくなって廃船となり、他の抑留船も台風による被害等があったが、1632年9月以来日本に監禁されていたピーテル・ノイツが1636年6月4日（寛永13. 5. 1）付を以て3年9ヶ月ぶりに釈放されて、最終的にこの事件は終わった。

第4章 鄭氏台湾

第1節 一官鄭芝龍

スペインは1626年5月に台湾のキールン（鶏籠・基隆）を占領し、タイオワン事件の1628年にタンショイ（淡水）を占領し、サント・ドミンゴ城を築いて台湾北部を支配した。又オランダはタイオワン事件解決後、「バタビア～タイオワン～平戸」の航海が軌道に乗り、ポルトガルは寛永15年（1638）2月末に島原の乱が終った翌寛永16年（1639）7月5日を以て徳川幕府と国交断絶となった。その翌寛永17年（1640）にはマカオからのポルトガル貿易再開使節団が長崎に入港し受難事件となるが、それは別稿に譲り、寛永18年5月17日（1641. 6. 25）オランダの日本商館は出島に移転完了した。これによってオランダ側の航海は、「バタビア～タイオワン～出島」となった。この1641年8月、オランダは攻略軍を編成して^{キールン}鶏籠に向わせた。当時スペインがフィリピン南部のミンダナオ方面を重視して徐々に台湾の兵力を削減しつつある¹⁰⁸⁾との情報を得、またポルトガルがスペインの支配を脱したからであるが、また一面では、「（淡水附近の）¹⁰⁹⁾噂の金鉱を発見し、島の安寧のため住民の反逆者並びに今日まで帰順せざる者を降伏せしめんがため¹¹⁰⁾」でもあった。但しこの年は成功せず、翌1642年8月26日¹¹¹⁾に^{キールン}鶏籠のサン・サルバドル本城が降伏してオランダは概ね台湾全土を制圧した。

1642年1月28日のバタビア城日誌に、「中国人はしばしば鹿の猟獲を切願せり。但し穴を設けずただワナを用い、これに対して従前と同じく料金を納め、皮と肉は中国に輸送せんことを請いたり。（タイオワン）長官は会社に $\frac{1}{10}$ を納めしめてこれを許可すべきものと思えり」とあって、実質的にオランダ領同然となっていたことが知られる。そしてこの当時の海上の情況は現今の平和時の航海と異り、「ヤハト船……海南島の内海岸において……多数のジャンク船あるを見たり。その中数艘を捕獲せんと欲せしが、（ヤハト船の1隻が）危険なる干

潟に乗上げしためこれを中止せり」と1642年3月13日のバタビア城日誌にあるように弱肉強食の時代であったことを我々は知らねばならない。そして台湾島もオランダの完全領有というものでなく、「フォルモサに於ては我が国人（オランダ）は淡水を経てソトミヨルに出征せしが、住民より襲撃せられ、70人を遺棄して引上げたり。そのうちオランダ人は21人にし、て他は中国人・フォルモサ人及び黒人なり」と1644年2月18日のバタビア城日誌にも記録されている様な、オランダの点と線を主とする制圧でしかなかったし、スペインも、「^{キールン}鷄籠に在りし18年間、淡水の住民と戦いたり¹¹²⁾」という状態であった。そしてオランダの「バタビア～タイオワン～出島」の定期的航海の確立に拘らず、台湾附近に於ては、「一官（鄭芝龍）は中国国王の承認を経たる右取引及び条約を破りたるのみならず、タイオワンへの輸出をも妨害し、右商品を自ら収め、マニラ及び日本に輸出せしめたり。バタビアの上司は暫らくこれを黙過せしが、今回オランダ国民との条約に違背してタイオワン以外の場所に於て貿易を行なう者は、これを襲撃して拿捕することに決定せり。……一官は有力なるが故に、復讐としてジャンク船をもってタイオワンの水道を塞ぐことその他、力の及ぶ限りのことをなすべし。中国人の言によれば、一官はその部下の首領達に対し、オランダ人の暴力に反抗せず血を流さざる為には、彼等に降伏すべしと命じ、彼は後にその損害に利子を付して報ゆべしと言える由なり、云々」と1643年12月2日の長崎商館日記抄にある。

時間は遡るが、「1641年6月26日（寛永18. 5. 18）夕刻、一官のジャンクが1隻長崎に入港した。この船は積荷を売るためにタイオワンに入港したが、そこ長官から、日々待受けているバタビア発の諸船は多くの商品を積んでいるから待つように伝えられたが、一官の指図を受けた上、20日ばかり碇泊した後出帆して、12日で当地（長崎）に着いたのであるという。同船の積荷は¹¹⁴⁾白生糸5700斤・黄生糸1050斤・綸子5000反・白紗綾15000反・赤縮緬5000反・白縮緬7000反・緞子2700反・麻布7700反（以下略）。

1641年7月1日（寛永18. 5. 23）夕刻、安海から一官の第2のジャンクが入港。同船の積荷は、¹¹⁵⁾白生糸6000斤・白縮緬16700反・紗綾8000反・綸子4500反・麻布3300反・白銀3200斤（以下略）。このジャンクで来た支那商人等の言によれば、同船並びに後続の3隻は皆タイオワンに渡って商品を売捌く筈であったが、そこに現金がないと聞いて当地（長崎）に来た由。また一官は（タイオワンの）会社がタイオワンでの貿易を断ったため、日本渡航の口実ができて非常に喜んだこと、云々。

1641年7月4日（寛永18. 5. 26）一官の第3船が安海から着いた。積荷は、¹¹⁶⁾白生糸14000斤・黄生糸13500斤・赤縮緬18000反・各種綸子10000反・白紗綾21300反・緞子2700反・白縮緬4300反（以下略）。

1641年7月5日（寛永18. 5. 27）ある商人の話では本年一官が当地（長崎）に遣わす砂糖船は12隻であるが、その第1船が正午入港した。積荷は、¹¹⁷⁾白砂糖19800斤・ロホ（鮫）の皮20枚（以下略）。

1641年7月12日（寛永18. 6. 5）一官の第2砂糖船が白砂糖270000斤を積んで入港し

た。¹¹⁸⁾

1641年7月14日（寛永18. 6. 7）福州から一官のジャンク船が2隻（長崎）入港した。積荷は、白砂糖139200斤・黒砂糖10300斤・氷糖30000斤・白鏝16000斤・白綸子13550反・上等縮緬7200反・白紗綾7300反・水銀1500斤（以下略）。」

一官として有名な鄭芝龍は、1621年頃根拠地を台湾に置いた海寇の巨頭顔思齊が1625年に死んだ後を継ぎ、一党の首領となったが、航海と貿易の利便を考えて根拠地を対岸中国本土泉州の南30里の安海に置き城を築いて安平鎮と称した。寛永5年（1628）7月、鄭芝龍は泉州政庁の要請に応じ明廷に帰順する事とした。但し明朝は「海盜鄭一官を討平したる功により、義士鄭芝龍を海防遊撃に任ず」という同一人物のカラクリによって官爵を授けたという。¹²⁰⁾前記長崎オランダ商館日記等に出てくる長崎入港唐船の始発港「安海」は、芝龍の根拠地であり、城名の安平鎮は後の鄭成功の時代に、タイオワンのゼーランディア城がこれに改称されることとなる。¹²¹⁾

1628年6月1日のバタビア城日誌に、「我等はまた支那海賊が海上の主となり、我が国人は之に対して退却の余儀なきに至りたりと聞けり。賊一官はジャンク船1000艘を有し、しばしば陸を襲い、陸上20哩の地まで土人を逐い、厦門及びハイトンを占領し、之を破壊焚焼し、また人を殺したれば諸人皆彼を恐る¹²²⁾」とあるように、或時には鄭芝龍は明の将として行動したものである。但し「海より城内に運河を通じ、舳艫直ちに邸内に入り、率いる所の兵は官給によらず自らこれを養い、旗幟鮮明、才甲堅利にして其徒も競って精励した。凡そ賊免れて海に入るもの芝龍の手を藉るに及んで袋のものを探るが如し¹²³⁾」とあって、先進文明国の官吏・軍隊ではなく、割拠領主的であり、「通商航海の船舶は悉く芝龍に金を納めて、航海の令旗を得、これによって通航の安全を計ったもので、商船1艘の納金3000両といい、芝龍が1年の収入は1000両に達す。この故にその富は国に匹敵す¹²⁴⁾」とあるのは、我国瀬戸内の村上水軍が帆別船¹²⁵⁾と称して通行税を取立てていたのと同類であろう。

何れにしてもそのような時代の海商兼水軍の将であって、1630年（寛永7）には都督に任ぜられ、1640年（寛永17）には「福建参将に任じ、累遷し三省総戎大將軍に至る」。1644年（正保元）には「南安伯に封ぜられ」、1645年（正保2）には「平国侯に封ず¹²⁶⁾」というふう

に明朝末期の混乱期の風雲児であった。

1641年（寛永18）時の前記長崎入港唐船の積荷内容をみれば、一官が海賊であるという印象は極めて少く、しかも鄭氏船の動向によって長崎の生糸の相場が左右される程の支配力をもち、競争相手のオランダ船貿易にも大きな影響を与えていたという。オランダ側からは海賊視したにしても、中国の諺の、「寇と商とは同じく是れ人なり。市通ずれば、則ち寇変じて商となり、市禁ずれば則ち転じて寇となる」の類であり、東南アジア海域に於けるオランダもまたこれと趣を同じくする。¹²⁷⁾

第2節 鄭成功の鄭氏台湾

鄭芝龍の子、鄭成功は1645年、22才のとき明の隆武帝に拝謁して国姓（朱）を賜わり、御営中運都督となったが、翌1646年（正保3）父鄭芝龍は清に降って北京に護送され、この後は鄭成功が明朝のために大活躍して国姓爺^{こくせんや}と呼ばれるようになる。

鄭成功は潮州府饒平県の南澳から厦門島と金門島の間の鼓浪嶼に拠り、ここを根拠として清軍を攻め、一時は蜂起した明の遺臣によって雲南・貴州・広東・広西・湖南・江西・四川の7省に勢力を及ぼしたが、次第に清軍に押されて行った。1647年5月14日（正保4・4・10）の長崎オランダ商館日記に、「老一官は捕えられて北京に送られ、その子は船400隻を率いて海に逃れたと伝えられる」。また同月29日（正保4・4・25）に、「一官の子はその弟と小ジャンク700隻と多数の兵を率いて澎湖島に行き」ともある。そして清朝は鄭成功の海軍力を圧迫すべく、1655年（明暦元）海禁を実施したためじり貧となって行く。

通航一覽（巻212）によれば、中国の清軍と明軍の抗争の間、鄭芝龍は正保2年12月（1646年1～2月）日本に武將を派して明朝再興の援助を要請した。しかしこれは長崎オランダ商館日記に「一官からタルタル人との戦に援助を願い出て、奉行権八殿から江戸に報告したが、何の効もなかった」とあるように、幕府はその文書の不備を以て22ヶ条の覚書を送付して援助拒絶の理由とした。¹²⁸⁾

後に慶安2年（1649）建国侯鄭彩（芝龍の一門）から長崎奉行宛に、また鄭成功から唐通事に宛てて援助願の文書が来たが、幕府はこれにも応じなかった。¹²⁹⁾ 万治元年（1658）6月の鄭成功からの依頼に関して「長崎虫眼鏡」に、「万治元戌のとし6月24日、国せんより使者ぶね1艘入津す。人数147人乗わたる。本はかた町糸会所いわた七左衛門方へ宿仰付けられ数日逗留す。然れども使者並に進物等御受けなされず、9月20日荷物積み出し帰帆す」とある。

我国では数々のキリスト教禁止令を出し、第5次にわたる鎖国令を最終的に寛永16年（1639）に出して、鎖国が完成した後である。それに加えて、鄭芝龍一家がキリスト教信者であることは長崎奉行を通じて幕府には知れていた。1644年9月26日（正保元・8・26）の長崎オランダ商館日記に、「一官邸のミサ」「安海のキリシタン」と記載あり、同年10月29日（正保元・9・29）に、「奉行はキリスト教について一官のジャンクで当地（長崎）に來た事務員と、重立った支那人数人を、この3～4日引続いて取調べ、中には拷問にかけるものもある」¹³⁰⁾ともある。

さて、このようにして日本の援軍も希望がなくなっていくのであるが、清朝は鄭成功の海軍力を圧迫すべく1655年に海禁を実施したため、じり貧となって行く。そこで鄭成功は台湾に拠ろうとしたのである。

既に1649年2月に、「通詞八左衛門と孫兵衛が来館、身分のある支那人と談話の際、タイオワンの華僑は既に10000人に上り、オランダの城塞その他の占領を企てる様子があり、昨年安海でその計画について相談が行われた噂もあると聞いた由語った」¹³¹⁾と長崎オランダ商館

側では把握していた。然しこれが実行されたのは1661年（寛文元）であった。

最後のタイオワン長官であったフレデリック・コイエットの「閑却されたるフォルモサ」によるゼーランディア城開け渡しまでの経過は次の通りである。

- (1) 1660年7月にバタビアから派遣されたタイオワン救援艦隊司令官ヤン・ファンデル・ラーンは、鄭成功についての話を信じようとしなかった。
- (2) タイオワン評議会は同艦隊により、国姓爺（鄭成功）のもとに少尉オイラールツを使節として派遣したが、国姓爺は彼を款待し¹³²⁾タイオワンの人々のあらゆる疑惑を除くよう偽りの態度をとった。
- (3) ヤン・ファンデル・ラーンの救援艦隊はバタビアに帰ったが、タイオワン評議会はバタビア総督宛にフォルモサ（台湾）が国姓爺に奇襲を受ける危険の情報を伝え、ヤン・ファンデル・ラーンの意見に反して軍勢の一部をタイオワンに留めることとした。
- (4) これに対しバタビア検察長官は、1661年3月22日にバタビア帰着したヤン・ファンデル・ラーンの悪口を真に受けてタイオワン当局を告発しようとした。
- (5) 国姓爺はフォルモサ（台湾）の中国人から自らに届けられた書簡を通じて、自分がフォルモサを奇襲したという知らせがバタビアに届かないようにしさえすればタイオワンはバタビアから見捨てられてしまうに違いないと簡単に結論を下した。実行を北方季節風の吹き止むまで延期していたのは、このことが原因だった。
- (6) 1661年4月30日、国姓爺の軍勢は陽の光をあびて数百隻の軍船に14部隊11700名の兵士を満載してゼーランディア城から見えるところに姿を現わし、ラキェムイ水道（第2図参照）を通過して台江（内海）に入った。
 { オランダ側はラキェムイ水道が浅いので、侵入はタイオワン島と北線尾島との間の水道を通過するものと考えて防備していた。それでラキェムイ水道から進入する様子を見て、鄭軍は水路を知らず、今に全船覆没するべしと談笑しつつあるうち、鄭軍は易々と内海に侵入したので、オランダ人は始めて狼狽周章した。¹³³⁾ }
- (7) 国姓爺軍はサッカムとバクセムボイに上陸し双方小競り合いがあった。
 { オランダ人は中国人を蔑視し、臆病で女々しい連中であると考えていたので、中国人の勇敢な攻撃に極度の恐怖に襲われた。 }
- (8) 3～4時間のうちにプロヴィンシア砦は完全に包囲され、フォルモサ人と籠城側は切り離されてしまった。
- (9) 国姓爺は、台湾が中国領なりとの当然の要求という理由書を以てゼーランディア城と島全体を要求したが、タイオワン評議会は最後の1人になるまで城を守り抜くと決議した。
- (10) 5月4日プロヴィンシア砦は降伏し、オランダ人はゼーランディア市を引きあげて全員ゼーランディア城に入った。国姓爺軍は放棄されたゼーランディア市を占領した。
 （プロヴィンシア砦占領のとき鄭成功は20万俵の米穀と1000頭の豚を掌中にした。¹³⁴⁾）
- (11) ゼーランディア城攻防の小競り合いがあったが、国姓爺は兵糧攻めを考えたようであった。

- (12) バタビアは、長官の解任を含むタイオワン長官と評議会を厳罰に処せらるべしとした1661年6月21日付書簡を翌6月22日に新長官クレンクに持たせて出発せしめたが、新長官出発2日後の6月24日にタイオワン包囲の報告がバタビアに達した。バタビアはその書簡と新長官を取り戻すべく1隻のヤハト船を急派したが、ヤハト船は追いつけなかった。
- (13) 国姓爺は1661年6月27日・28日・30日にゼーランディア開城勧告を行なった。
- (14) バタビアに於て、フォルモサ救援艦隊の司令官に始めはファンデル・ラーンが選ばれたが彼は拒否し、不適格なヤコブ・カーウが任命された。艦隊は1661年7月5日バタビアを出発した。
- (15) バタビアからの新長官クレンクは1661年7月30日にタイオワンに到達したが上陸出来ず、バタビアの6月21日付書簡のみを小琉球島から密使を以て陸上に届けた。¹³⁵⁾そしてクレンクは季節風を利用して日本へ向け8月1日に出発した。途中、中国船を捕獲沈没せしめる事件を起した。
- { タイオワンからは基隆と淡水の守備隊をタイオワンに戻すべく3隻の船を台北に派遣していたが、それらの守備隊は6月19日に日本に向けて退去していた。 }
- (16) カーウの救援艦隊10隻は1661年8月12日にタイオワンの泊地に到着し、悪天候を昌して兵士と火薬・食料品が陸揚げされたが、天候悪化により8月17日にタイオワンを離れた。
- (17) 国姓爺は、オランダ艦隊がタイオワンを離れた8月17日夜から兵士をゼーランディア地区に増強した。救援艦隊は嵐がおさまったので再び9月8～10日にタイオワンの泊地に戻って来たが、逆風その他により海上作戦は失敗した。
- (18) 1661年11月6日にタルタル（清国）の福州太守から、オランダへの援助と援軍の申出が到着した。カーウはタルタルへの使節を申出て、2隻の船で出発したがバタビアへ向けて逃亡した。
- (19) 国姓爺の得意な兵糧攻めのもと、ゼーランディア城からは脱走が続き、1662年1月25日ユトレヒト砦が落ち、遂にゼーランディア城も1662年（寛文2）2月1日に降伏開城した。
- このようにして、1662年2月1日にゼーランディア城が開城すると共に、（基隆はその後オランダ側が1664年8月27日¹³⁷⁾から1668年10月18日¹³⁸⁾まで再占拠した時期もあったが）自然的に鄭成功は全台湾を支配する形になって行った。彼は台湾を東寧と改め、台南赤嵌の地に承天府を置き、台湾北部と台湾南部に万年・天興の2県を置いた。これ以後ゼーランディアは、鄭芝龍が泉州の南、安海の築城を安平鎮と称したその名称をここに移し、城は安平鎮、その附近一帯を安平^{アンピン}と称するようになって行った。従ってオランダの対日本ルートも、一時的には「バタビア～基隆～出島」となり、後に「バタビア～出島」に変わった。
- 鄭成功は1662年5月に39才で死し、子の鄭經が後を継ぎ、一旦は本土上陸するが清軍に敗れて後は台湾に帰り、台湾名称を東寧から東都に改め、万年・天興の2県を2州に改めた。後に廈門・泉州・漳州・潮州を支配下におさめたこともあるが、軍を台湾に引いた。1681年（天和元）その子の鄭克塽が後を継いだ¹³⁹⁾が、1683年（天和3）清に降って鄭氏台湾は亡んで、

1683年に清の中国統一は完成となる。

この間、清国は鄭氏に対抗するため1661年に中国人が海外に出ることを禁ずる遷海令を出し、福建・浙江・江南の沿岸居民を内地に移し居住民と鄭氏との交易を禁止した。¹⁴⁰⁾逆にこの間、鄭氏台湾はイギリス東インド会社と通商条約を結び、「長崎～台湾～インド」の中継貿易を行なった。¹⁴¹⁾鄭氏滅亡ののち清国は1684年（貞享元）に遷海令を廃止し、展海令（開国令）を出した。この2令の前後の中国船の長崎入港隻数は次の通りで、展海令の翌年から中国船が急激に増加して行ったことがわかる。

長崎入港唐船数 ¹⁴²⁾			
1650年（慶安3）	70	1672年（〃12）	43
1651年（〃4）	40	1673年（延宝1）	20
1652年（承応1）	50	1674年（〃2）	22
1653年（〃2）	56	1675年（〃3）	29
1654年（〃3）	51	1676年（〃4）	24
1655年（明暦1）	45	1677年（〃5）	29
1656年（〃2）	57	1678年（〃6）	26
1657年（〃3）	51	1679年（〃7）	33
1658年（万治1）	43	1680年（〃8）	29
1659年（〃2）	60	1681年（天和1）	30
1660年（〃3）	45	1682年（〃2）	26
※1661年（寛文1）	39遷海令	1683年（〃3）	27
1662年（〃2）	42	※1684年（貞享1）	24展海令
1663年（〃3）	29	1685年（〃2）	73（積戻12）
1664年（〃4）	38	1686年（〃3）	84（〃18）
1665年（〃5）	36	1687年（〃4）	115（〃22）
1666年（〃6）	38	1688年（元禄1）	117（〃77）
1667年（〃7）	32	〃（唐船定数を70艘と定める）	
1668年（〃8）	43	1689年（元禄2）	70唐人屋敷完成
1669年（〃9）	38	1690年（〃3）	70
1670年（〃10）	36	1691年（〃4）	70
1671年（〃11）	38		

なお、プロヴィンシア砦が陥落したとき、鄭成功は20万俵の米穀を掌中にしたとあるが、これを事実とすれば、そして1662年までタイオワン長官をつとめたコイエットの、「（フォルモサ人は）田を充分に持っていたとしても、自分たちが必要とする食料を手に入れるためだけにしか播種しない」を信用すればこの米は日本米であったのか、それとも中国江南各地の米も含めてのものだったのか。1654年（承応3）9月の長崎オランダ商館日記の、「フォル

モサの統治については……大いに心配しており、遠からず一層困難な事態が起り、食糧難に陥る心配があるので米8000～9000俵・小麦400～500俵を注文され……¹⁴³⁾」，1654年10月の，「輸出用の米11000俵乃至12000俵と小麦3000～4000俵の売込み……¹⁴⁴⁾」，「米と麦の買入れにつき交渉したが，上方に多く送られるため，昨年よりずっと高い。通詞らが明日から積荷を始める許可を得た。……米は美しい見本通りの品であった¹⁴⁵⁾」等の記録からすれば，大部分は日本米であったものと思われる。

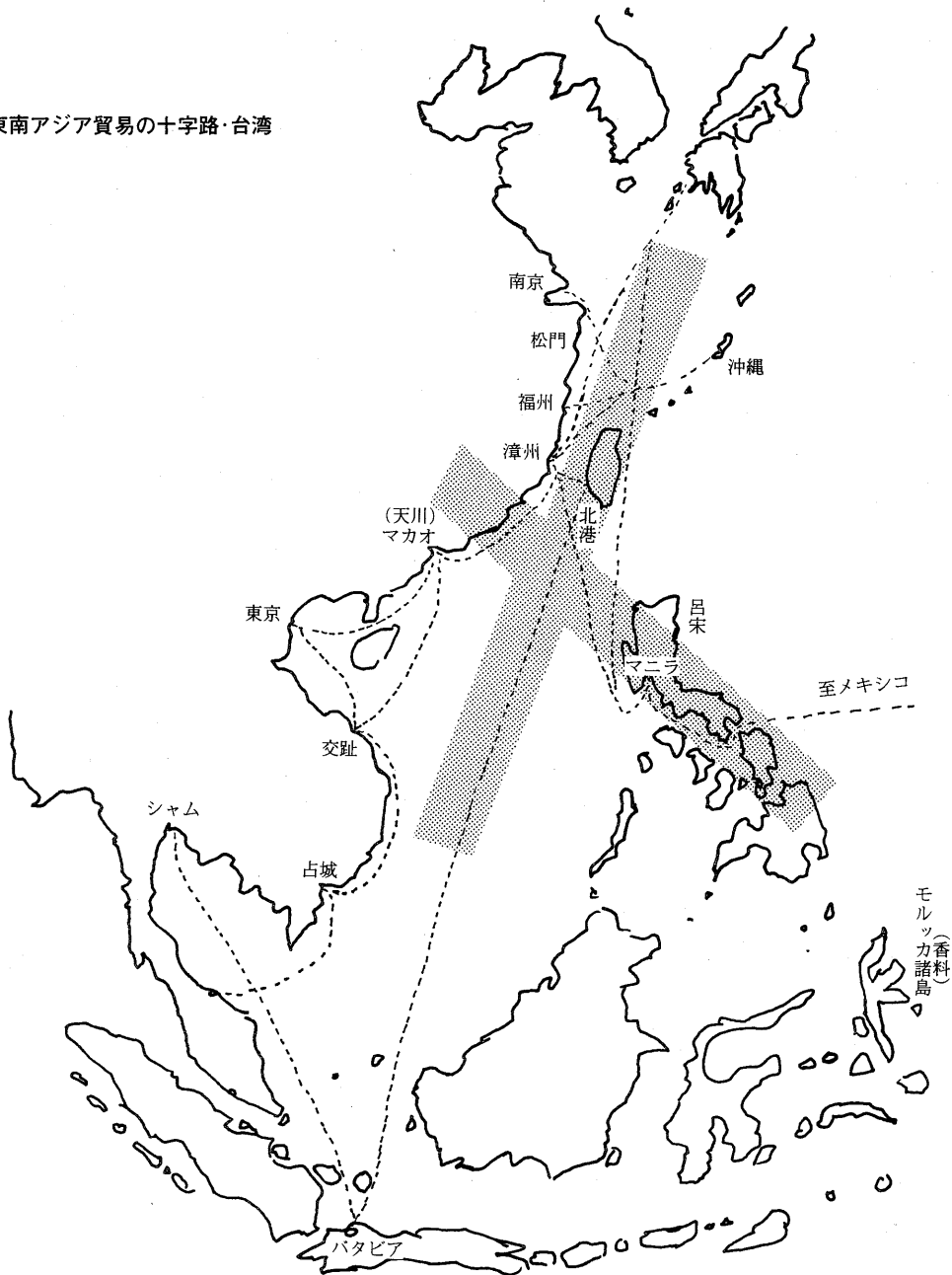
第5章 結び

さて，このようにオランダのゼーランディア占有から鄭氏台湾までをみてきたが，1624年のバタビア城日誌によるフォルモサ（台湾）人の，日本の時代と比較すれば縄文人乃至弥生人的といえる生活風土は，同時代のフィリピンよりはやや遅れている。これは，フィリピン諸島がその南部及び南西部の各離島・半島との交易及びイスラムの流入による文化の向上がみられたのに対し，台湾はアジア大陸と至近距離にありながら，幸運というべきか海を隔てていただけに中国大陆の政争・動乱にまき込まれることがなく17世紀まで縄文乃至弥生と思える時代で推移したのは，一つの奇蹟といってよいのではあるまいか。日本の，朝鮮半島・対馬・宍岐が大陸の通路となっている形に比し，この一步の距離を置いて大陸と対峙する姿勢は，この台湾島の本質的特質であるかのように見える。これは17世紀以後も，中国の勢力下に入りながらも，台湾独自の，時代から一步も二歩も遅れた形でひっそりと過ごし，19世紀から20世紀に入って，日本の支配とそれからの解放，現在はやはり中国大陆とは異なる台湾の姿で推移しているのは，地理的位置の特殊性によるものとも考えることも出来よう。

ところが，台湾を一つの島として観察せず，これを台湾海峡・バシー海峡まで含めて考えると，台湾島内の生活風土とは大いに異なる様相を見せる。即ち，日本と東南アジア航路，中国南東部沿岸とフィリピン・モルッカへの航路の極めて重要な十字路に位置する。否，十字路そのものと認識できるのである。

時期を現代にずらして見てみれば，前に記した**日本～東南アジア航路は北米航路～日本～東南アジア**と拡大するのであるが，その場合でも台湾は重要な十字路の位置を失うことはない。そのみならず，船舶保有に於て現在世界第1位の **Evergreen** 社を有して，台湾は嘗てのタイオワン即ち安平の南々東に位置するカオシュン（高雄）が安平港の代りに台湾最大のコンテナ港として飛躍的に大きくなり，1988年の貨物取扱高は308万 TEU に達して世界第4位であり，台湾第2のコンテナポート基隆港は同年164万 TEU ¹⁴⁶⁾ を取扱っている。地の利としては，現在は基隆港が工業地帯に隣接して優位にあるが，山に囲まれ切りたっているので設備拡張が意のままにならないため台湾第2の地位にある。これは17世紀のフォルモサ時代のタイオワン・キールンの姿そのままといえる。但し台湾の経済的發展の急ピッチはニュー台湾ドルの上昇となり，高賃金にひかれて大陸中国人・フィリピン人・その他の東南アジア人などが流入し，そのため台湾は労働集約型生産拠点を逆に中国大陆・東南アジアに移

東南アジア貿易の十字路・台湾



しての高付加価値商品の生産拠点となりつつある。

台湾の1989年下半期の経済成長率は7.59%と前年同期の6.67%を上回る模様であるが、これは開発プロジェクトへの投資増と韓国の労使紛争を回避しての予想外の輸出受注増が景気を支えているのが原因といわれ、台湾の貿易黒字が引続き拡大基調を辿っていることは、前

に述べた独自の活躍を行い得るような地理的特殊性ということの継続的有利性と、また東南アジアに於ける航路の十字路に位置していることにあると考えるとき、17世紀のフォルモサ時代とは隔世の感があるにしても、台湾の発展はアジア全体の経済のためにも喜ばしいことである。

何れにせよ台湾は、朱印船時代前後の日本にとって、深いかわりを持ち続けてきた。

本稿を終えるに当たり、あらためて倭寇や東アジアの貿易の消長が、中国（明朝・清朝）の海禁政策とうらはらの関係にあったこと、1624年にオランダ大航海的貿易伸長力が当時の中国官憲の台湾は中国の支配下に非ずとする認識のもとに、日本の商船がここを貿易上の一拠点としていた事実にも拘らず、軍勢力を以て自らの根拠地とし、それが「自由な貿易は武器の力を以て開かざるべからず」の方針のもと、支那ジャンクを「正当なる捕獲物と認定」するが如き弱肉強食行動が横行した時代にあって、我国がポルトガル・スペイン・オランダ・イギリスに何等侵蝕されることがなかったことは、統一政権が樹立されてあったという毅然たる事実がそれをさせなかった、と考えるほかはないであろう。

また、ノイツと浜田弥兵衛のタイオワン事件に関しては徳川幕府の官僚的悠長な対応にも拘らず、当時の在日オランダ商館側の優秀な対人能力が、ノイツに代表されるオランダ東インド会社の一つのマイナス面を、大いなる信用のもとに差引してプラスに好転させ、ヨーロッパで唯一の対日本貿易国として盛え得たのは、17世紀に於けるヨーロッパ勢の中で偉としなければならぬであろう。

最後に、台湾がフォルモサ、即ち麗^{うわ}しの島という名に値いする平和郷であり続けてほしいと願うものである。

注

- 1) 戴国輝・西村睦男「台湾（省）」『平凡社大百科事典9』平凡社、1985年、164頁。
- 2) 日本史料集成編纂会編『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成実録之部』国書刊行会、1979年。
- 3) 山辺健太郎『現代史資料21』「台湾1」みすず書房、1971年、7頁。
- 4) 『バタビア城日誌上巻』日蘭交通史料研究会、村上直次郎訳、1937年、5頁。
- 5) 『バタビア城日誌上巻』日蘭交通史料研究会、村上直次郎訳、1937年、49～50頁。
- 6) 『通航一覽巻211』「唐国部7」382頁。
- 7) 稲垣孫兵衛『鄭成功』原書房、1929年、245～250頁。
- 8) 『バタビア城日誌上巻』28～29頁。
- 9) 『バタビア城日誌上巻』32～33頁。
- 10) フレデリク・コイエット「閑却されたるフォルモサ」『オランダ東インド会社と東南アジア』生田滋訳・注、岩波書店、1988年、296頁。
- 11) フレデリク・コイエット「閑却されたるフォルモサ」『オランダ東インド会社と東南アジア』生田滋訳・注、岩波書店、1988年、296頁、生田滋注。
- 12) フレデリク・コイエット「閑却されたるフォルモサ」『オランダ東インド会社と東南アジア』生田

滋訳・注，岩波書店，1988年，296～299頁。

13) 『バタビア城日誌上巻』31頁及び33～34頁。

14) コイエット，前掲書，301～303頁。

15) 『バタビア城日誌上巻』30～31頁。

16) コイエット，前掲書，295頁。

17) コイエット，前掲書，296頁。

18) 1542年11月1日にメキシコのナヴィダードを出航したルイ・ロベス・ド・ヴィラボスは翌43年2月29日にミンダナオ島に到着した。ヴィラボスはミンダナオ島を中心とする島々を，スペインのフェリペ皇太子に因んでフィリピンと称すべきだとカルロス1世に献言し，この群島の正式名となった。

19) 守川正道『フィリピン史』同明舎出版，1980年版，8頁。

20) 守川正道『フィリピン史』同明舎出版，1980年版，8頁。

21) 守川正道『フィリピン史』同明舎出版，1980年版，8頁。

22) 憑承鈞『支那南洋交通史』大東出版社，1940年，井東憲訳，238頁。

23) 長沢和俊『海のシルクロード史』中央公論社，1989年，117頁。

24) 憑承鈞，前掲書，83頁。

25) 守川正道，前掲書，10～11頁。

26) 藤本勝次編『海上交通の史料』『海のシルクロード』大阪書籍，1982年，史料10，202頁。

27) 藤本勝次編『海上交通の史料』『海のシルクロード』大阪書籍，1982年，史料9，199頁。

28) ボイス・ペンローズ『大航海時代』筑摩書房，1985年版，荒尾克巳訳，196頁。

29) 守川正道，前掲書，9頁。

30) 日本史料集成編集会編，前掲書，12頁。

31) 『明史』巻323，列伝211，外国4「呂宋」の条（守川正道前掲書，12頁）。

32) 守川正道，前掲書，11～12頁。

33) 守川正道，前掲書，27頁。

34) ボイス・ペンローズ，前掲書，196～197頁。

35) 守川正道，前掲書，36頁。

36) 岩生成一『続南洋日本町研究』岩波書店，1987年，282頁。

37) 守川正道，前掲書，40～41頁。

38) 守川正道，前掲書，43頁。

39) 渡辺世祐「我が史料より見たる戦国時代東西交渉史」『東西交渉史論』史学会編，富山房，1939年，47頁。

40) 岩生成一『新版朱印船貿易史の研究』吉川弘文館，1985年，33頁注（箭内健次「マニラの所謂パリヤンについて」台北帝大史学科研究年報，第5輯，312～332頁）

41) 『新版朱印船貿易史の研究』33～34頁。

42) 稲恒孫兵衛，前掲書，169頁。

43) 『新版朱印船貿易史の研究』12頁。

- 44) 『新版朱印船貿易史の研究』14頁。
- 45) 『新版朱印船貿易史の研究』14～15頁。
- 46) 守川正道，前掲書，61頁。
- 47) 守川正道，前掲書，64頁。
- 48) 山本紀綱『長崎唐人屋敷』謙光社，1983年，37頁。
- 49) 稲垣孫兵衛，前掲書，164頁。
- 50) 『長崎市史・通交貿易編西洋諸国部』清文堂，1981年復刻版，380頁。
- 51) 川島元次郎『朱印船貿易史』内外出版，1921年，91頁。
- 52) 岩生成一『統南洋日本町の研究』岩波書店，1987年284頁。
- 53) 皆川三郎『平戸英国商館日記』篠崎書林，1967年版，195～196頁。
- 54) 皆川三郎，前掲書，18頁，95頁。
- 55) 日本史料集成編纂会編，前掲書(三)，949～950頁。
- 56) 『長崎市史・通交貿易編西洋諸国部』384～385頁。
- 57) 「長崎名家略譜」『長崎叢書下』長崎市役所編，原書房，1973年復刻版，579頁。
- 58) 『統南洋日本町の研究』286～287頁。
- 59) 『バタビア城日誌上巻』11～12頁。
- 60) 『長崎市史・通交貿易編西洋諸国部』369頁。
- 61) 『バタビア城日誌上巻』，13頁以下。
- 62) 『バタビア城日誌上巻』，22～23頁。
- 63) 『バタビア城日誌上巻』，22～23頁。
- 64) 『バタビア城日誌上巻』，28頁。
- 65) 『バタビア城日誌上巻』，28頁。
- 66) 『バタビア城日誌上巻』，61頁。
- 67) 『バタビア城日誌上巻』，序29頁。
- 68) 『バタビア城日誌上巻』，30～31頁。62頁。
- 69) 『統南洋日本町の研究』290頁，292頁。
- 70) 『バタビア城日誌上巻』，20頁。
- 71) 『バタビア城日誌上巻』，72～89頁。
- 72) 『バタビア城日誌上巻』，91～92頁。
- 73) 『バタビア城日誌上巻』，序12頁。
- 74) 幸田成友『日欧通交史』岩波書店，1942年，309頁。
- 75) 幸田成友『日欧通交史』岩波書店，1942年，310頁。
- 76) 永積洋子訳『平戸オランダ商館日記第1輯』岩波書店，1980年版，14～15頁。
- 77) 幸田成友，前掲書，311頁。
- 78) 「長崎港草」『長崎文献叢書第1集第1巻』長崎文献社，1973年，31頁。
- 79) 『平戸オランダ商館日記第1輯』73頁。

- 80) 『バタビア城日誌上巻』92頁。
- 81) 幸田成友, 前掲書, 年表30頁には寛永5. 4. 24とあり, 長崎港草は長崎出港を寛永5. 3. 3タイオワン着を3月20日としているが, 季節風による南下を考えると, 3月3日長崎発が真実に近いようである。
- 82) 『平戸オランダ商館日記第1輯』序説5頁。
- 83) 幸田成友, 前掲書, 314頁。
- 84) 「長崎港草」31～32頁。
- 85) 幸田成友, 前掲書, 314～315頁(1630年1月14日平戸発ナイエンローデ書簡, スペックス宛) 及び平戸日記第1輯224頁(1628年9月7日ピーテル・ムイゼルの日記)。
- 86) 『平戸オランダ商館日記第1輯』, 297頁。
- 87) 『平戸オランダ商館日記第1輯』, 297頁。
- 88) 『平戸オランダ商館日記第1輯』, 284頁, 407頁。
- 89) 『平戸オランダ商館日記第1輯』, 282頁, 407頁。
- 90) 『平戸オランダ商館日記第1輯』, 序説7頁及び398頁, 452頁。
- 91) 『平戸オランダ商館日記第1輯』, 394, 395, 404, 441頁。
- 92) 『バタビア城日誌上巻』95～96頁。
- 93) 『平戸オランダ商館日記第1輯』200, 289, 320, 324, 330, 412, 414, 417頁。
- 94) 『バタビア城日誌上巻』95頁。
- 95) 『平戸オランダ商館日記第1輯』420頁。
- 96) 『平戸オランダ商館日記第1輯』422, 441, 442, 450頁。
- 97) 永積洋子「長崎とオランダ」『昭和63年度長崎県民講座』長崎県教育委員会, 14頁。
- 98) 『バタビア城日誌上巻』, 94頁。
- 99) 『バタビア城日誌上巻』, 156～157頁。
- 100) 『バタビア城日誌上巻』, 161頁。
- 101) 『バタビア城日誌上巻』, 167頁。
- 102) 『バタビア城日誌上巻』, 191頁。
- 103) 『平戸オランダ商館日記第1輯』序説11頁ほか。
- 104) 『バタビア城日誌上巻』114頁及び「平戸オランダ商館日記第2輯」520頁。
- 105) 『平戸オランダ商館日記第2輯』, 401頁。
- 106) 『平戸オランダ商館日記第2輯』, 404頁。
- 107) 『平戸オランダ商館日記第2輯』, 409, 420頁。
- 108) 『バタビア城日誌2』村上直次郎訳注, 中村孝志校注, 平凡社, 1972年, 227頁。
- 109) 『バタビア城日誌2』村上直次郎訳注, 中村孝志校注, 平凡社, 1972年, 201頁。
- 110) 『バタビア城日誌2』村上直次郎訳注, 中村孝志校注, 平凡社, 1972年, 226頁。
- 111) 『バタビア城日誌2』村上直次郎訳注, 中村孝志校注, 平凡社, 1972年, 228頁。
- 112) 『バタビア城日誌2』村上直次郎訳注, 中村孝志校注, 平凡社, 1972年, 281頁。

- 113) 『バタビア城日誌 2』 257頁。
- 114) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第1輯』岩波書店, 1980年版, 50頁。
- 115) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第1輯』岩波書店, 1980年版, 53頁。
- 116) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第1輯』岩波書店, 1980年版, 55頁。
- 117) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第1輯』岩波書店, 1980年版, 56～57頁。
- 118) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第1輯』岩波書店, 1980年版, 58頁。
- 119) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第1輯』岩波書店, 1980年版, 58～59頁。
- 120) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 186頁。
- 121) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 193頁。
- 122) 『バタビア城日誌上巻』 91頁。
- 123) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 2頁。
- 124) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 2頁。
- 125) 城山三郎『秀吉と武吉』朝日新聞社, 1986年, 21頁。
- 126) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 5～6頁。
- 127) 『長崎事典, 産業社会編』長崎文献社, 1989年版, 39頁。
- 128) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 38～42頁。
- 129) 『通航一覧巻213』 403頁。
- 130) 『長崎オランダ商館日記第1輯』 366頁及び稲恒孫兵衛前掲書, 114～115頁。
- 131) 『長崎オランダ商館日記第2輯』 235頁。
- 132) 村上直次郎訳注・中村孝志校注『バタビア城日誌 3』平凡社, 1975年, 192頁。
- 133) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 317頁。
- 134) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 323頁。
- 135) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 330頁。
- 136) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 322～323頁。
- 137) 『バタビア城日誌 3』 342頁。
- 138) 『バタビア城日誌 3』 364頁。
- 139) 稲恒孫兵衛, 前掲書, 12～17頁。
- 140) 菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』九州大学出版会, 1988年, 423頁。
- 141) 『長崎事典・産業社会編』 39頁及び『長崎市史・通交貿易編西洋諸国部』 541～545頁。
- 142) 『新長崎年表上』長崎文献社, 1974年。
- 143) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第3輯』岩波書店, 1980年版, 315頁。
- 144) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第3輯』岩波書店, 1980年版, 318頁。
- 145) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館日記第3輯』岩波書店, 1980年版, 324頁。
- 146) 「NTドル急騰下の台湾」日本海事新聞, 1989年7月20日, 16頁。
- 147) 『日本郵船調査月報』1989年7月号, 7頁。